

平成 20 年度

学位論文

障がい者を同胞にもつきようだいの
家族観に関する研究

弘前大学大学院教育学研究科 学校教育専攻 臨床心理学分野

07GP110 谷川友子

第1章 問題と目的

1, 障がい者の定義

障がい者の自立及び社会参加支援のための施策に関して、基本的理念を定めた障がい者基本法によれば、障がい者は「身体障害、知的障害又は精神障害（以下障害と総称する。）があるため、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者をいう」と定義されている。この定義は1993年に改正されたもので、障がいを身体障がい、知的障がい、精神障がいの3つに包括し（佐藤,2001）たことが特徴的であろう。この法律の定義に基づいて、さらに身体障がい者福祉法、知的障がい者福祉法、精神障がい者福祉法の3法でそれぞれの対象の定義がなされている。

佐藤（2001）は、障がい者の定義について、2種類の定義が考えられると述べている。一つ目は、「目の不自由なAさんの場合にも、脳卒中のため右まひがあるBさんの場合にも、統合失調症のCさんの場合にも、共通する障がいの本質的な特徴は何かを考える、本質的な定義」である。二つ目は法律上の定義であり、佐藤（2001）はそれを「操作的便宜的な定義」であると位置付けた。

後者は、国や地方自治体が施行する福祉サービスの対象を明らかにする点では、大変重要な定義であると考えられる。障がい者を同胞にもつきょうだいや家族に関する研究も、同胞の障がいの種別や程度を考慮した支援を提言する研究も見受けられる（たとえば、柏村,2004；浅井ら,2004；田部井,2006）。

しかしながら、佐藤（2001）が指摘するように「障がいがあること」の意味には、大きな個別性があると考えられる。さらに、障がい者自身が、障がいをどのように意味付けるかということに個別性があるように、その家族やきょうだいにとっても、障がいの法的な定義や分類を超えた、障がいがあることまたは、障がい者と暮らす家族であることへの意味付けに対しての個別性もあると考えられる。また、小島（1999）も、障がい者福祉に結晶化された基本概念の一つとして、障がいの個別化の原則を挙げている。小島（1999）によれば、障がい者に対する支援は、同種の障害というように、レッテルはって十把一からげの支援をすることを慎まなければならないと厳しく述べている。このように、障がい者に対する支援が個別性を重視しているように、その家族に対する支援もまた、一様ではなく個別性に目を向ける必要があるだろう。さらに、障がいを「操作的便宜的定義（佐藤,2001）」に限定せず、個別の意味で障がい者を同胞にもつきょうだいや家族について捉える事は、きょうだいに対する支援を考える上で重要であると思われる。

本研究では、前述のような、障がいの分類や種別によるきょうだいへの影響や家族の捉え方に差異があるだろうという指摘や予測も考慮しつつ、「操作的便宜的定義（佐藤,2001）」だけにとらわれない、障がい者を同胞にもつきょうだいが、当事者としてのきょうだいの意味、または家族の意味を重視するという立場で、障がい者を同胞にもつきょうだいの家

族観を個別的に検討することを目的とする。そのため、本研究での障がい者の定義は、種々の障がいの定義の基本であり、より包括的に障がい者について定義されている「この法律において「障害者」とは、身体障害、知的障害又は精神障害（以下障害と総称する。）があるため、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者をいう。」という障害者基本法で用いられている定義をとりあえず用いておきたい。

また、近年「障害」という表記を「障がい」と議論がなされている。「障害」という表記は「障碍」または「障礙」と表記されていた。戦後になり「碍・礙」の文字が常用漢字として使用できなくなったことを受けて、常用漢字の「害」の字を用い、現在は「障害」と表記している。「碍・礙」という字は、「妨げる」という意味で用いられているが、「害」という字は、「妨げる」に加えて、「悪いこと」という意味も含んでいる。この「害」という字の使用に際して、桑原（2009）は、ネガティブなイメージやマイナスのイメージがあると訴える当事者が出てきていることを指摘している。また、障がい者も、そうでない者も、その垣根を越えて、平等な生活を送ることができる社会を目指す、ノーマライゼーションの立場から、「障害」という表記は、当事者の社会参加において心理的・社会的な障壁の一つとなりえると考えられる。

こうした議論を受けて、行政文書の「障害」という表記を「障がい」と見直す動きが、地方自治体単位で行われている。たとえば、福岡市では、2009年1月から、行政文書で原則的に「障がい」と表記することになった。また、鳥取県では、県の権限が及ばない法律・条例、または組織の名称を除いて、「障害」という表記を「障がい」と表記するという取り組みを2008年12月現在行っている。

本研究では、上記のような障がい者を取りまく社会的な背景を受け、先行研究の引用・著書名・題名を除くすべての「障害」という表記を「障がい」と表記する。また、障がい者である同胞と障がい者でないきょうだいが社会で共生していく上での、きょうだいの当事者としての意味や体験について個別的に検討していくという本研究の目的からも、マイナスまたはネガティブなイメージといった特定のイメージの想起をできるだけなくするために、「障がい」という表記を用いることとする。

2、障がい者を同胞にもつきょうだいに関する研究の概観

従来の障がい者のきょうだい（以下、兄弟姉妹の中で障がいのある者を「同胞」、障がい者でない者を「きょうだい」と表記する）に関する研究は、きょうだいの適応的な側面や、心理的・社会的な問題に焦点を当てた研究、きょうだいに対する支援に関する研究が多く見受けられる。

例えば、心理的・社会的な問題に焦点を当てた研究として、原・西村（1998）は、小学1年生から中学3年生までを対象に、障がい児きょうだいと対照群との適応について、質問紙調査を行っている。それによると、きょうだいは、少なくとも中学生までは不安や抑うつや大きな不適応はなく、自己に対する意識では、肯定的に解釈できる結果も得られてい

る。しかし、浅井ら（2004）の軽度発達障がい児にまつわる問題がきょうだいの心理的問題や行動面の問題に関連していると考えられた23症例を対象とした検討では、きょうだいが保護者的な役割を担ったり、過剰適応をしている症例も報告されており、きょうだいの適応に対する見解は一様ではない。さらに、浅井ら（2004）の研究からは、母親のストレスがきょうだいに影響を与えているという示唆を得ている。その中でも、母親が同胞のパニックや多動、集団不適応について、軽度発達障がいに起因するものであるという視点がないことから養育上のストレスを抱え、きょうだいに影響を与えていた症例が多いことが挙げられた（浅井ら，2004）。また、障がい児が生まれたことで祖父母から母親が責められる、父親の理解が得られず、母親が家族の中で孤立してしまう（浅井ら，2004）など、母親のストレスといっても、その様相は家族内での様々な相互作用によって引き起こされることが予想される。その相互作用の結果は、家族システム内に入り込んでいるきょうだいたちにも何かしらの作用を生じさせると考えられる。

また、きょうだい支援に関する実証的研究も多くなされている。例えば、戸田（2005）は、自身の教育相談や障がい児サークル支援活動の経験や、そこで行ったアンケート調査の結果から、地域にきょうだいを支える集団の必要性を述べている。具体的には、「きょうだいが主人公になる場・活動の提供」「第三者の大人の存在の提供」「障がいの理解につなげる取組みの提供」の3つを提言している。また、田倉・辻井（2007）は、広汎性発達障がい児を同胞にもつきょうだいに対して、自己理解・障がい理解プログラムを組み合わせた支援プログラムの試みを報告している。それによると、このような支援プログラムを経験することで、きょうだい同士の仲間意識が育まれること、同胞の障がい特性について考える時間を持ち、同胞の理解を深めるきっかけとなったこと、日常生活から解放された空間で、日ごろの制約から解放されリフレッシュできることが示唆されたと報告している。さらに平川（2004）は、自閉症について客観的・科学的に知り、問題行動への対処を学習し、仲間を作り、ストレス発散することなどを目的として、自閉症児・者のきょうだいを対象にきょうだい教室を開いている。平川（2004）が開催するきょうだい教室は、きょうだいにとってストレス発散や知識を増加できる場所となっていることも然ることながら、ソーシャルサポートが構築され、きょうだいにとっての居場所となっているということも報告されている。これらの取り組みは、きょうだいにとって同じ悩みを持ち、互いに支え合える体験をすることや、障がいについての正しい知識を得、きょうだいが同胞に対しての理解を深める場として、一定の効果を示し、また、きょうだい支援の一翼を担う重要な取り組みであると考えられる。しかしながら、これらの取り組みは、家族外の場面での社会的支援としての枠組みの中で論じられており、きょうだいが日常生活の大半を過ごす家族内場面でのきょうだい支援については、課題や展望として述べるに留まっている。

その一方で、近年の療育・福祉の分野では、障がい者の家族・きょうだい支援の重要性が注目されている。例えば、広川（2006）は、障がい幼児の利用する通園施設（児童デイサービスを含む）の職員を対象に、障がい児のきょうだい支援に関しての問題意識と具体

的施策についてアンケート調査を行った。その結果、多くの現場ではきょうだいに発達上の問題が存在することも認めつつも、制度上の問題から、具体的な支援は一部の施設における試行的な段階にとどまっている現状が明らかとなった。また、田部井（2006）は、重度心身障がい者を中心とした、障がい者を同胞にもつきょうだいのライフサイクルについてまとめ、その時期ごとに望まれる親の行動や、社会的資源を活用したきょうだい支援の取り組みを提案している。また、前述の平川（2004）・田倉・辻井（2007）でも、家族内場面での支援についての重要性も示唆している。さらに柳澤（2005）は、自閉症児のきょうだい支援に関して、自閉症を症状などの一般的知識ではなく「家族としての同胞」を理解していくための、一つの要素として用いることの重要性について言及している。また、柳澤（2005）は「家族としての同胞」をきょうだいがどのように捉えているかを考慮し、きょうだいに提供すべき情報を考えていく必要があるとも述べている。しかしながら、きょうだいが家族という文脈の中に同胞、あるいは自己をどのように位置付けているかということを検討した研究は見受けられない。

障がい者を同胞にもつきょうだいに関する西村（2004）のレビューでは、年長きょうだいの早熟化や年少きょうだいの役割逆転など、障がい者を同胞にもたない兄弟姉妹とは違った役割を求められる傾向があると述べている研究がいくつか挙げられている。また、Siegel, B. & Silverstein, S.（1994）は、障がい者を同胞にもつきょうだいの類型化を試みており、親代わりする子ども（Parentified Children）、優等生になる子ども（Superachieving Children）、退却する子ども（Withdrawn Children）、行動化する子ども（Acting-out Children）の4つに区分している。Siegelらはどのパターンの子どもにも負荷がかかっていることを指摘しており、それを受けて西村（2004）は、家族の中できょうだいが役割を得ること、自分の位置を確かめうるものが、きょうだいに安心をもたらすと述べている。また、これと同様の意見を述べる研究（芝崎ら、2006）も見受けられる。

ところで、位置という言葉には、単に物理的な距離関係を示す意味と、集団全体、あるいは他との関係で占める場所や立場を示す意味がある。家族集団における位置とは、後者の意味で用いられていると考えられる。つまり、ここで述べられている位置という言葉は「家族集団内、または家族成員との関係で占める場所・立場及び地位」と換言することができる。小山（1967）は、「家族における地位には、社会的に期待される一定の行動様式を伴って（中略）それぞれの地位に応じて、たんに家族員相互の間だけでなく、それを含む社会から、一定の行動様式をとるものと考えられ（中略）、このような家族内の地位と結びついて社会的に期待される行動様式ないし、行動基準がすなわち家族内の役割である」と述べ、さらに、「地位と役割は不可分である」と述べている。このように、家族集団内での位置・役割の共通項として、家族成員との関係の中で自ら獲得したり、他者から期待されたりといった、家族成員間の相互の影響力や関係性が挙げられる。家族内での影響力や結びつきを、特にきょうだいがどのように認知しているかを捉えることは、きょうだいの位置・役割を明らかにする上で重要と考える。

3, 目的

これまでいくつかの先行研究を概観してきた。そこから、障がい者を同胞にもつきょうだいの当事者としての意味や体験について、位置・役割という視点から検討することは、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族理解につながり、きょうだいの家族支援を個別的に考える資源の提供に結びつくものであると考える。

家族についての統計的な手法を用いた調査は、主に質問紙によるものがよく目に留まる。しかし、きょうだいの同胞に対する思いは、「障がい者には優しくしなければいけない」というような社会規範や、風潮に影響される可能性が考えられる。西村・原(1996)によると、ディマイヤーはきょうだいの作文などに表されるきょうだいの姿は、本来の感情に比し控えめな内容と見るのが正しいと捉えていることが述べられている。質問紙のみでの研究では、上記のような理由から、きょうだいが感じている家族観やきょうだい観を十分に捉えきれないのではないかと考えた。

このような限界を克服するために、動的家族描画法(Kinetic FaRily Drawings 以下、KFD と略す)などに代表される投影法を用いた手法が、調査方法の一つとして考えられる。日比(1986)は、非言語投影法としての描画を、質問紙法と比べて、個人の赤裸々な欲求や態度を理解するためには、その個人が日常生活で示す、様々な規制や自我防衛が要をなさない状況と説明している。しかしながら、KFD に表現される情報は、非常に多義的であり、表現された描画から、位置と役割について焦点化した情報を得ることが困難であること、また、谷川・柴田(2007)で、実施の際「絵を描くこと」に少なからず抵抗を感じている様子が見られたことなどから、獲得したい情報に焦点を当て、さらに調査協力者に負担の少ない調査方法を検討する必要があると望まれる。

家族を表現する投影法の一つとして、家族イメージ法(FaRily IRage Test 以下FIT と略す)がある。秋丸・亀口(1988)によって独自に開発された家族を対象とする心理アセスメント法である。FIT を用いた研究としては、大下・亀口(1999)の中学生の家族イメージの特徴を明らかにした研究や、小沢(2005)による視線コミュニケーションの研究、前出・島谷(2004)による分析指標の検討、片平(2005)による大学生の現在の家族イメージと理想の家族イメージの検討、中坪ら(2006)によるFIT を用いた質的研究法の開発などがなされている。FIT では、回答条件がKFD よりも限定される分、調査協力者が認知する家族成員の位置やパワー・結びつきなどによる家族成員の関係性に焦点を絞ることが可能であると考えられる。KFD ほど詳細な解釈は困難であるが、限定された情報で、焦点を絞って家族像を読みとることができると考え、本研究では主に家族成員の位置を捉える方法として使用した。また、シールを貼るという行為は、絵を描くという行為よりも自由度が低く、調査協力者が比較的取り組みやすいと思われる方法であるため、実施に際して調査協力者への負担も少ないと思われる。

本研究では、FIT が描画法に近い要素を持ち合わせていると判断し、その解釈に必要であると思われる、描画法ではPDIに相当すると思われる質問項目を調査者が考え作成した。調

査が郵送であることもあわせ、FIT の解釈をより正確なものにする目的で作成したものである。

役割に関する質問紙は、橘・島田（1998）で使用された質問項目を使用した。きょうだい役割については、例えば母のお手伝いのような、行動レベルで担うもの以外に、行動として現れてはいないが、家族集団の中できょうだいが期待されていると意識するものも含まれると考えた。橘・島田（1998）で用いられた質問項目は、同胞の影響、家族に対する意識を調査する目的で作成された質問紙であるが、きょうだいの家族内での役割に関する項目を含み、かつ、同胞の影響や家族に対する意識について顕在的なレベルでの測定が可能であると判断し、家族像をより明確に考察するために、FIT とのテストバッテリーを組み合わせで使用した。

以上を踏まえ、本研究では、障がい者を同胞にもつきょうだいを、きょうだいが捉える家族の相互作用の中での位置・役割という視点から捉え、その位置と役割の関係から得られる、家族観についての数量的・記述的検討を行う。

本研究は、5章から構成されている。第1章では、障がい者を同胞にもつきょうだいの先行研究を踏まえ、問題と目的について述べた。第2章では障がい者を同胞にもつきょうだいと、そうでないきょうだいにおいて、家族内での役割や同胞の影響・家族に対する意識の構造がどのような特徴や傾向を示すかについて、橘・島田（1998）で作成された質問項目を用いて数量的な検討を行った。また、この章で検討した特徴や傾向は、第3章以降で行った事例の検討において、その事例を解釈する際の資料としても用いた。第3章では、障がい者を同胞にもつきょうだい8名を対象にして、きょうだいの家族観について探索的な事例の検討を行った。第4章では、第3章で得られた家族観について、それがきょうだにとってどのような意味をもつものであるかを、半構造化面接により検討した。第5章では、前章までを踏まえ、きょうだいの家族観について全体的な考察を行った。また、家族内におけるきょうだい支援のリソースについても検討した。

第2章 きょうだいの家族・同胞に対する影響・意識に関する質問紙

調査

1. 目的

ケイガン（1979）は、障がいをもたない兄弟姉妹の性格特徴に関する研究を行い、子どもの人格発達にきょうだい関係が影響し合うと述べている。また、家族システム論から兄弟姉妹関係を見ると、兄弟姉妹サブシステムは、子どもたちが互いに遊んだり、喧嘩したり、助け合ったり、嫉妬したり時には我慢したりといった、兄弟姉妹間の相互作用を通して、家族の中や社会的環境の中での役割を身につけていく一つの環境であると考えられる。しかし、大淵（1992）は、「もしも、子供の家族が非常に特異な習慣を持っていたりすると、家族と家族外世界の境界は不当にも硬直したものになり子どもは外部世界への適応に困難を感じるであろう。」と述べている。障がい者を同胞にもつきょうだいの家族習慣や環境が特異なものであるとは断言できないが、障がい者を同胞にもつきょうだいの適応や、役割について、障がい者を同胞にもたない兄弟姉妹の場合とは異なるという研究結果も見受けられる。

例えば、Siegel,B.&Silverstein,S.（1994）は、きょうだいの類型化を試みており、その中の一つに親代わりする子ども（Parentified Children）、というパターンを見出している。このパターンのきょうだいは、同胞に対して親の役割を担い、その役割は同年代の子どもがする以上のことをすることを中心に特徴づけられている。同年代の子どもがする以上の役割を担うことは、きょうだいにとって、負担であることが予想される。さらに、西村（2004）のレビューでは、年長きょうだいの早熟化や、年少きょうだいの役割逆転について述べたいくつかの研究も報告されている。

西村（2004）は、脳性マヒの同胞の介助を経験したきょうだいの著書を受けて、その思想の形成と同胞とのかかわりは重要な比重を占めていることが推測されると述べている。きょうだい家族の中で担う役割については、このように同胞を含む家族とのかかわりの中で、自分の立場や役割をどのように認知しているかということが関係していると考えられる。

そこで、本調査では、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観を検討するために、特にきょうだいの役割について検討することを目的とする。きょうだい役割については、例えば母のお手伝いのような、行動レベルで担うもの以外に、行動として現れてはいないものの、家族集団の中できょうだい期待されていると意識するものも含まれると考えられる。そのため、きょうだい同胞を含む家族からどのような影響を受けていると認知しているか、また、同胞を含む家族に対する意識について、その特徴や傾向を検討することで、きょうだい家族成員の相互作用をどのように捉えているかを見出すことができると考え

られる。このような、きょうだいの意識や同胞からの影響をきょうだいがどのように捉えているかといった、現状や今後の展望について、包括的に検討できる尺度が必要であると考へ、橘・島田（1998）で用いられた質問項目を使用した。橘・島田（1998）で用いられた質問項目は、同胞の影響、家族に対する意識を調査する目的で用いられた質問紙であるが、きょうだいの家族内での役割についての項目を含み、かつ、家族内で起こっている相互作用と関係すると考へられる、影響や家族に対するきょうだいの意識について顕在的なレベルでの測定が可能であるとも判断し、調査に使用することとした。

また、本調査は、第 3 章以降で行った事例の検討において、その事例を役割の点から解釈する際の資料としても用いた。

2. 方法及び調査協力者

(1) 調査協力者

調査協力者は H 大学大学生男女 87 名で、心理学関係の講義を受講する学部 2・3 年生、87 名である。

(2) 手続き

2008 年 7 月に大学の講義時間内に「あなたとご家族についてのアンケート」と称して、質問紙調査を実施した。調査用紙は橘・島田（1998）で用いられた質問項目、全 35 項目を使用した。調査協力者にはこれらの質問項目について「1:非常によくあてはまる」から「4:まったくあてはまらない」の 4 件法で回答してもらった。同時にフェイスシートでは、氏名、性別、家族構成について記入してもらった。

調査用紙は前述の 87 名に配布し、85 名（男性 28 名、女性 57 名）から調査用紙の回答を得、回収率は 97.7%であった。調査用紙は講義時間内に配布し、持ち帰っての回答を求めたが、ほぼすべての調査協力者がその場で記入をし、提出してくれた。所要時間は 10 分弱であった。このうち、兄弟姉妹のいない 8 名を除く 77 名（男性 23 名、女性 54 名）を、障がい者を同胞にもたないきょうだい群として、分析対象とした。

この他に、第 3 章で行った調査で、障がい者を同胞にもつきょうだい 13 名（男性 6 名、女性 7 名）からも、同様の質問紙の回答を得た。これら 13 名から得たすべての回答を、障がい者を同胞にもつきょうだい群として、分析対象とした。

両群の表記については、橘・島田（1998）にならい、障がい者を同胞にもつきょうだい群を HS 群、障がい者を同胞にもたないきょうだい群を NHS 群と表記する。なお、橘・島田（1998）では、HS 群・NHS 群を個別に因子分析を行っていたが、抽出された因子が比較的類似したものであると判断し、今回は HS 群・NHS 群コミで因子分析を行った。

3. 結果

(1) きょうだいの家族・同胞に対する影響・意識尺度の因子分析の検討

橘・島田 (1998) によるきょうだいの家族・同胞に対する影響・意識尺度, 全 35 項目について天井効果, フロア効果を確認した。天上効果が見られた 4 項目とフロア効果が見られた 2 項目を除き, 因子分析を行った。因子分析は主因子法を用い, バリマックス法による直交回転を行った。1 回目の因子分析で抽出された因子の中に, 因子負荷量の高い項目が少ない場合と, 因子負荷量の高い項目でも, それが .40 程度の項目だけの場合について, それらに該当する項目を除いた全 20 項目について再度因子分析を行った。その結果, 5 因子が抽出された (表 1)。因子負荷量 .40 以上の項目を各因子を構成する項目として, α 係数と平均値及び標準偏差を算出した。

第 1 因子は「きょうだい (同胞) と一緒に, お互いを高めあいながら生きていきたい」, 「自分の結婚にきょうだい (同胞) の同意が必要だと思う」, 「きょうだい (同胞) とはよく話したり, 遊んだりして, 仲のいい方だ」などが高負荷を示し, 現在から将来にかけて, また, 行動的な面から精神的な面にかけて, きょうだい (同胞) の影響を意識していることから「きょうだい (同胞) からの影響」と命名した。第 2 因子は「ボランティア活動をしたい」, 「社会をよくするための努力をしたい」などが高負荷を示し, 社会福祉に関わるような活動に対しての関心を示していることから「社会福祉への関心」と命名した。第 3 因子は「自分の家族は地域に受け入れられていると思う」, 「きょうだい (同胞) のことについて誰にでも話せる」, 「もし家の仕事を継がなければならない場合, 自分が継ぎたいと思う」などが高負荷を示し, 社会的な環境と家族との関わりに対する態度であることから「家族とそれを取り巻く環境との関わり」と命名した。第 4 因子は「自分ときょうだい (同胞) の進学, 就職がお互いに影響しあうと思う」, 「きょうだい (同胞) が社会的に低い職業に就いた場合, 抵抗を感じる」などが高負荷を示し, きょうだい (同胞) が就職, 進路を決定する際のきょうだい (同胞) に対する気づきであることから「就職・進路決定の際のきょうだい (同胞) に対する意識」と命名した。第 5 因子は「家族の絆は強い方だ」, 「結婚しても, 親やきょうだいの近くに住みたい」などが高負荷を示し, 家族との親密な関係を希望することから「家族とのつながり」と命名した。なお, 「家族とのつながり」は α 係数が .580 と低い, .60 に近いこともあり, 因子として採択した。

表 1：きょうだいの家族・同胞に対する影響・意識尺度の因子分析結果

質問項目	因子					共通性
	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子	
20)きょうだい（同胞）と一緒に、お互いを高めあいながら生きていきたい	.634	.286	.218	.040	.167	.549
3)自分の結婚にきょうだい（同胞）の同意が必要だと思う	.621	-.062	.034	.293	-.005	.466
14)きょうだい（同胞）とはよく話したり、遊んだりして、仲のいい方だ	.537	.094	.043	-.026	.377	.442
8)進路選択や職業選択の際には、きょうだい（同胞）のことも考える	.526	.165	.177	.308	.153	.453
26)自分にとってきょうだい（同胞）は尊敬すべき大切な存在である	.514	.337	.239	-.027	.135	.454
18)ボランティア活動をしたい	.154	.811	-.095	.018	.207	.691
25)社会をよくするための努力をしたい	.239	.682	.149	.087	.144	.573
33)社会福祉に関わる仕事に就きたい	-.003	.487	.109	-.065	.065	.238
28)自分の家族は地域に受け入れられていると思う	.005	.062	.633	.178	.164	.464
34)きょうだい（同胞）のことについて誰にでも話せる	.116	.106	.569	.030	.140	.369
5)もし家の仕事を継がなければならない場合、自分が継ぎたいと思う	.091	-.153	.557	-.078	.091	.356
29)できれば困ったときにきょうだい（同胞）に対する経済的援助をしたい	.229	.216	.485	.014	.007	.332
35)障がい者に優しい人と結婚したい	.165	.307	.417	.126	-.121	.326
16)自分ときょうだい（同胞）の進学、就職がお互いに影響しあうと思う	.265	-.177	.161	.648	-.004	.547
27)きょうだい（同胞）が社会的に低い職業に就いた場合、抵抗を感じる	-.048	.024	-.087	.626	.125	.418
13)就職に就く際、きょうだい（同胞）の職種などが気になる	.320	.064	.159	.459	.055	.345
15)親戚づきあいを深くしていきたい	.251	.140	.039	.453	.323	.393
4)家族の絆は強い方だ	.390	-.095	.085	.076	.631	.572
10)結婚しても、親やきょうだい（同胞）の近くに住みたい	.093	.132	.080	.104	.527	.321
7)地元で就職したい	-.195	.294	.231	.093	.406	.351
因子寄与	2.59	1.95	1.78	1.57	1.46	
累積寄与率	11.76	20.61	28.71	35.88	42.55	
α 係数	.799	.693	.673	.684	.580	
HS 群における項目得点の平均値	2.50	2.28	2.03	3.08	2.36	
(SD)	(.436)	(.542)	(.482)	(.553)	(.460)	
NHS 群における項目得点の平均値	2.49	2.52	1.98	2.68	2.11	
(SD)	(.614)	(.605)	(.476)	(.561)	(.650)	

(2) HS 群・NHS 群におけるきょうだいの家族・同胞に対する影響・意識の差異

この 5 因子を構成する項目群の合計得点について、HS 群と、NHS 群の両群で回答の違いが見られるかどうかを確認するために、 t 検定を試みた。その結果、第 4 因子「就職・進路決定の際のきょうだい（同胞）に対する意識」のみ有意な差が認められた ($t(89)=2.37$, $p<.05$, HS 群の平均値（以下、HS と表記する）: 3.07, NHS 群の平均値（以下、NHS と表記する）: 2.67)。HS 群は、NHS 群に比べて、就職・進路決定の際、きょうだい（同胞）を意識しないと回答する傾向が認められた。

さらに、有意差が見られた因子を構成する項目について、両群での回答の差異を確かめるために、第 4 因子を構成する項目ごとに、両群で t 検定を行った。その結果、項目 13「就職に就く際、きょうだい（同胞）の職種などが気になる」($t(89)=2.97$, $p<.01$, HS : 3.54, NHS : 2.87) と、項目 16「自分ときょうだい（同胞）の就職・進学がお互いに影響しあうと思う」($t(89)=2.77$, $p<.01$, HS : 3.23, NHS : 2.54) で両群に有意な差が認められた。このことから、HS 群は NHS 群に比べて、職業に就く際、きょうだい（同胞）の職種などは気にならない、自分ときょうだい（同胞）の就職・進学がお互いに影響しあわないと回答する傾向が示された。項目 16 の結果は、橘・島田（1998）とも類似している。

また、有意差が見られなかった因子を構成する項目についても、両群で回答に差異がみられるかどうかを確認するために t 検定を行った。その結果、項目 33「社会福祉に関わる仕事をしたい」($t(89)=2.44$, $p<.10$, HS : 2.46, NHS : 3.03) で両群の回答の差に有意な傾向が認められた。また、項目 34「きょうだい（同胞）のことについてだれにでも話せる」($t(89)=2.32$, $p<.05$, HS : 2.38, NHS : 1.81) で両群の回答に有意な差が認められた。このことから、HS 群は NHS 群に比べて、社会福祉に関わる仕事をしたいと回答する傾向があることが示唆された。また、HS 群は NHS 群よりも、きょうだいのことについてだれにでも話せない回答することが示唆された。項目 33・34 については、橘・島田（1998）の回答と異なる結果となった。

4. 考察

これらの結果から、きょうだいは、特に自分自身の進学や就職について、自分自身の将来は自分で決定するものであると考えているとも推測される。また、きょうだいが、自身の就職・進路決定については同胞からの影響を受けたくないと考えたことが、回答に反映されたとも可能性もあろう。さらに、同胞が一般的な就労、または通常学級等への通学が望めない場合、きょうだい自身が同胞ときょうだいを同じ状況として捉え、比較することが困難であるために、就職・進路決定については、同胞からの影響が少ないと感じているとも推測される。また、きょうだいが自立に向かう局面において、同胞と自分自身を切り離して将来を考えたいと考えていることも推測される。

また、きょうだいは、社会福祉に関わる仕事をしたいと回答する傾向が示された。きょうだいは、進路・就職の際に、同胞の影響を受けないと回答していることから、社会福祉

分野に関する関心がもともと高い群であった可能性も指摘できよう。しかしながら、きょうだいは、同胞の介助を日常的に目の当たりにしている。その取り組みは、時に苦労や絶望を伴うものでもあれば、時に大きな喜びを見出すことのできるものであると考えられる。そのような行動とともに成長することで、きょうだい意識しないところで社会福祉への関心が芽生えたとも推測される。

さらに、HS 群は NHS 群よりも同胞のことについて他者に話すことができないと回答する傾向が示された。しかしながら、HS 群の平均値から「あてはまる」と回答する調査協力者が多いことがうかがえる。このことは、以前に比べ障がい者に対する偏見が少なくなってきたことで、きょうだいが障がいを持つ同胞のことについて、周囲に話しやすくなったことが推測されるが、話す相手や場所・立場によって、同胞の話をするか否かを選択していると考えられる。

今回の調査では、同一因子を構成する質問項目に対して、HS 群・NHS 群とで回答に差異がみられることが示された。このことは、HS 群と NHS 群では、家族・同胞に対する意識や影響について、質的に違いがあることを示唆していると考えられる。HS 群の回答においても、質的な差異があることが推測される。西村・原（1996）は、きょうだいと同胞との関係や家族の中での自分の役割の相違が、きょうだい達の反応に影響を与えていると推測されると述べている。また、井上ら（2003）は、きょうだいの心理的支援プログラムに関して、一人ひとりのきょうだいの心理的な特性やニーズに合わせたきめ細かい支援システムの必要性を述べている。このことから、HS 群の一般的な傾向を参考にしながら、家族の中でのきょうだいの関係性や役割について、個別的な事例の蓄積も重要であると考えられる。

なお、今回の調査では NHS 群が教育学部の学生ということもあり、特に第 4 因子の回答については、NHS 群の回答が属性による特徴的なものであった可能性も考えられよう。大学 2 年・3 年という時期は、進路・就職選択を現実的に考え始める時期であると思われ、そういった時期的な要因が特徴的な回答に反映された可能性も考えられるだろう。

第3章 障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観に関する事例検

討

1. 目的

前章では、障がい者を同胞にもつきょうだいが、同胞を含む家族からどのような影響を受けていると認知しているか、また、同胞を含む家族に対する意識について、その全体的な傾向を調査した。その結果、きょうだいは、特に自分自身の進学や就職について、そうでない兄弟姉妹よりも同胞の影響を受けないと回答する傾向が見られた。しかしながら、きょうだいが家族の中でどのような位置にあり、家族とのどのような関係性において生じた影響、または意識であるかは捉えられなかった。そこで、本章では、前述の点を踏まえて、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観について、位置、役割という視点から、個々の事例について検討をすることを目的とする。

家族内の位置や役割に代表される相互作用は、その家族によって、様々なあり様を呈すると考えられる。本調査では、そういった家族単位での個別性に目を向け、その特徴を詳細に記述することで、障がい者を同胞にもつきょうだいの個別的・統合的理解を目指す。

KFDを用いて障がい児・者のきょうだいが同胞に抱く心理的特性に関する研究を行った中村（2007）によると、本人すら意識していないきょうだいの心理と見出すためには、非言語による把握が有効であること、また、比較的簡便な描画を用いることで、きょうだいの内的世界を周囲の関係者はより理解し、将来への予防的な対処をしていくことが容易であると述べている。しかしながら、谷川・柴田（2007）では、「絵を描くこと」に抵抗を示している様子が見受けられることが報告されており、描画を用いることは、調査協力者に負担がかかると考えられた。そこで本研究では、家族の中での位置をきょうだいがどのように認知しているかを捉えるために、家族イメージ法（FIT）を用いた。

FITは、B4判のFIT用紙の一边15cmの正方形の枠内に、家族成員に見立てた円形のシールを配置することで、調査協力者がイメージする家族像を作成する。シールを貼るという簡略化された方法で、家族イメージを調査協力者が表現することは、描画に比べて負担が少ないと考えた。

シールは直径1.6cmで白（パワーイメージは1で一番弱い）から黒（パワーイメージは5で一番強い）に5段階に色分けされており、この色分けは各家族成員の発言力や影響力について、調査協力者が感じるパワーの強さを表す。円形シール内の印（鼻印）は、各家族成員の顔の向きを表す。各シールの間を3段階の線（強い、普通、わからない）で結び、各家族成員間の結びつきの強さを表す。また、各シール間の距離は、心理的距離を表す。

結果の整理は、亀口（2006）に従い、3つの段階を経て行った。第1段階では、両親の関係性に注目し、その位置関係、向き、結びつきの強度、及びパワーを確認する。第2段階

では、特定の子シールに焦点を移し、夫婦軸に対する向き、夫婦軸との関係及び親子のパワーの対比を確認する。本調査では、この子シールの解釈にあたって、主に調査協力者と同胞について注目して結果の解釈を行った。第3段階では夫婦間距離と親子間距離の比率と、シールの線分によって記録紙に投影された家族システムの占有率（面積）の大小を確認する。この第3段階の夫婦間距離と親子間距離の比率については、亀口（2006）では1.0より大きいか小さいかの二つに分類すると述べられている。しかし、本調査では数量的な検討ではなく個別的な検討で家族イメージを詳細に検討する目的から、比率ではなく実数で計測した。

また、FITは郵送調査も可能であるが、主に面接と併用しての臨床場面で用いられている方法である。そのため、FITをより正確に解釈する目的で、FITに関する自由記述式の質問紙を調査者が作成した。FITを解釈する際に重要であると思われる4項目、「1.シールを貼った順番」、「2.FIT作成時に同胞について感じたことや思い浮かんだイメージ」、「3.現在の家族の満足度について0～100点での評価」、「4.作成したFITのどの部分を変えると、調査協力者がより満足できる家族になるか」、を調査協力者に自由記述と段階評定で回答してもらった。

きょうだいの役割に関する質問紙には、橘・島田（1998）で用いられた質問項目、全35項目を使用した。調査協力者にはこれらの質問項目について「1：非常によくあてはまる」から「4：まったくあてはまらない」の4件法で回答してもらった。同時にフェイスシートでは、氏名、職業について記入してもらった。橘・島田（1998）では、HS群とNHS群のきょうだいに対する意識の比較をしているため、質問項目の記述を「きょうだい」と統一している。しかし、HS群での回答は、障がい者である同胞に対する意識を回答しているため、因子名・質問項目で表記されている「きょうだい」とは、「同胞」の意味であると考えられる。本研究では、表記の混乱を避けるために、項目・因子名で「きょうだい」と表現されているものを「きょうだい（同胞）」と表記する。

以下、「」で囲まれた部分は、調査協力者の自由記述の回答を示す。誤字・脱字と思われる部分についても、調査協力者が記述した表現をそのまま使用した。また、個人が特定される恐れのある情報は、大意を損なわない程度に研究者が変更を加えた。

2. 調査協力者及び方法

(1) 調査協力者

調査協力者は障がい者を同胞にもつきょうだい13名（男性6名、女性7名）。このうち、有効回答数は8名（男性4名、女性4名）である。きょうだいの年齢は10代後半から30代前半であった。

(2) 手続き

調査は A 県にある特別支援学校と障がい者支援団体を通じて、まずはきょうだいの両親へ調査の説明を書面で行った。次に、きょうだいの両親には、きょうだいに対する調査の趣旨の説明と、きょうだいに調査の協力の可否を尋ねてもらった。調査協力が可能であると回答したきょうだいに対し、特別支援学校を通して調査用紙を渡してもらった。障がい者支援団体を介して、調査協力が可能であると回答したきょうだいとは、調査者が直接メールのやり取りをし、郵送にて調査用紙を送付した。調査用紙と返信用封筒は角形 20 号の封筒に入れて厳封し、きょうだい以外の人物が調査用紙を手にしないう配慮した。

調査内容は以下の 3 つで、これらを 2008 年 5 月に調査協力者に発送した。調査協力者が回答の返送までに要した期限は発送から 3 週間とし、すべての調査協力者が期限以内に回答を返送した。調査協力者は 13 名（男性 6 名、女性 7 名）で、13 名全員から回答を得た。

(3) 調査内容

① 家族イメージ法 (FIT)

FIT は、B4 判の FIT 用紙の一边 15 cm の正方形の枠内に、家族成員に見立てた円形のシールを配置することで、調査協力者がイメージする家族像を作成する。シールは直径 1.6 cm で白（パワーイメージは 1 で一番弱い）から黒（パワーイメージは 5 で一番強い）に 5 段階に色分けされ各家族成員の発言力や影響力によって、調査協力者が感じるパワーの強さを表す。円形シール内の印（鼻印）は、各家族成員の顔の向きを表す。各シールの間を 3 段階の線（強い、普通、わからない）で結び、各家族成員間の結びつきの強さを表す。また、各シール間の距離は、心理的距離を表す。

② FIT に関する質問紙調査

FIT をより正確に解釈する目的で、FIT に関する自由記述式の質問紙を調査者が作成した。FIT を解釈する際に重要であると思われる 4 項目、「1.シールを貼った順番」、「2.FIT 作成時に同胞について感じたことや思い浮かんだイメージ」、「3.現在の家族の満足度について 0～100 点での評価」、「4.作成した FIT のどの部分を変えると、調査協力者がより満足できる家族になるか」、を調査協力者に自由記述と段階評定で回答してもらった。

③ きょうだいの家族・同胞に対する影響・意識質問紙調査

橘・島田（1998）で用いられた質問項目、全 35 項目使用した。調査協力者にはこれらの質問項目について「1：非常によくあてはまる」から「4：まったくあてはまらない」の 4 件法で回答してもらった。同時にフェイスシートでは、氏名、職業について記入してもらった。橘・島田（1998）では、HS 群と NHS 群のきょうだいに対する意識の比較をしているため、質問項目の記述を「きょうだい」と統一している。しかし、HS 群での回答は、障がい者である同胞に対する意識を回答しているため、因子名・質問項目で表記されている「きょうだい」とは、「同胞」の意味であると考えられる。本研究では、表記の混乱を避けるために、項目・因子名で「きょうだい」と表現されているものを「きょうだい（同胞）」と表記する。

3. 結果と考察

事例 B

<家族と強いつながりを実感し、今後は家族・同胞と距離を保ちつつ、その関わり方について模索している事例>

○ 依頼

依頼は研究者が調査依頼をした障がい者施設を通じて行った

○ 家族構成

父 (50代)・母 (50代)・長子 (調査協力者, 男, 20代, 以下 B と表記する)・次子 (障がい者, 女, 10代)

現在, 全員が同居している。

○ FIT 分析

(A) 夫婦シール

- ・位置：タテ (父下)
- ・向き：ナナメ。両者とも次子を見ている。
- ・結びつき：ふつう
- ・パワー：父 3, 母 3

(B) 子シール

- | | B | 次子 |
|---------------|---|------|
| ・夫婦軸への向き：垂直 | | 垂直 |
| ・パワー： | 4 | 4 |
| ・夫婦軸との関係：上下なし | | 上下なし |

(C) 全体

- ・夫婦間距離／親子間距離

父-母：4.8 母-B：7 B-次子：4.8

父-B：8.5 母-次子：8.5

父-次子：7

- ・占有率：15%
- ・世代間境界

引ける

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

B 次子軸：平行

○FITに関する自由記述

1、シールを貼った順番

B, 次子, 母, 妹

2、FITを作成したときにきょうだいについて感じたことや、思い浮かんだイメージ

妹は確かに私達家族との結びつきも強いし、影響力もあるけれども、実際に何かをするとき妹のことを考えている訳でもないの、本当に影響力があると言えるのだろうか、作成しながら不安になった。

3、家族についての満足度 70点

4、より満足できる家族になるために、どこを変化させるか

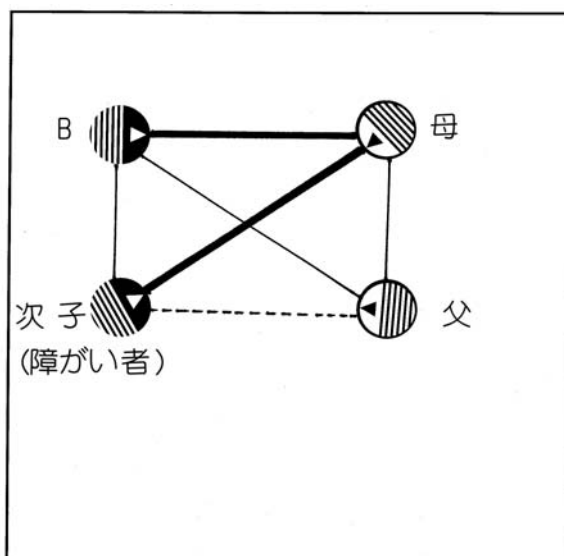
父と妹の結びつきの強化。

これによって家族全員が妹との結びつきが強いということになり、全員が妹のことを第一に考えた生活を送れるようになる。

○位置解釈

Bの作成したFITの配置は、親世代と子世代が左右に並列しており、亀口(2003)の指摘する、高校生に一般に見られる親子並列型であると考えられる。

まず注目できるのは、Bの位置である。従来の研究では、四角の上部におかれたものの方が、下部におかれたものよりも優位にあることが確認されている(亀口,2003)。Bは自身のシールを左上角に配置したこと、パワーイメージも両親より強いことから、Bは自身を家族内で優位な存在であると認知していることが示唆された。また、最初に貼られたシールは家族の中心人物であることが示唆されている(柴崎



ら,2001)。Bは自身のシールを最初に貼ったことから、家族の中で中心人物であると認知していることを表していることがうかがわれる。片平(2005)が大学生にFITを実施した際、最もパワーが強かったのは父、ついで母であり、自己は最もパワーが弱く、上記3者のパワーイメージについて分散分析を行った結果、有意差が見られている($F=13.70, p<.05$)。BのFITでは、両親よりもBのパワーイメージの方が強く表現された。

Bは、次子のパワーイメージについて「妹(次子)は確かにわたしたち家族との結びつきも強いし、影響力もあるけれども、実際に何かをするとき妹(次子)のことを考えているわけでもないの、本当に影響力があるといえるのだろうか、作成しながら不安になった。」と記述している。この記述から、Bがイメージしている次子の家族への影響力と、実

際の次子の影響力に不一致を感じていることが示唆される。

B の FIT からは、母と B、次子との結びつきの強さが目を引くが、父と B、次子との結びつきはさほど強くない。次子と父に関して、B は関係をわからないと表現した。B は、FIT 作成後の感想に「母が家族の誰とも結びつきが強いことがわかった」と記述していることから、母と家族全員が結びつきが強いことを、FIT を通して実感していたと考えられる。一方、父についての記述は、「(より満足できる家族になるために) 父と妹 (次子) の結びつきの強化。これによって家族全員が妹 (次子) との結びつきが強いということになり、全員が妹 (次子) のことを第一に考えた生活を送れるようになると思う。」というように展望している。このことから、B は家族成員間の結びつきという点で、父を結びつきが強いとイメージしていないことがうかがわれる。母と障がい者である次子との結びつきが強いと表現されたこと、父と次子との結びつきがよくわからないと表現されたことは、家族の中で次子の介助を母が表立ってやっていることや、障がい者に対する親の会などの外部の活動を行うのは、父ではなく母であるのではないかと予想される。また、父と次子との結びつきがよくわからないと表現されたことについては、次子の介助について、父の協力が不足していると B 自身が感じていることも予想される。

○役割解釈

第 1 因子「きょうだい (同胞) からの影響」構成項目群の B の得点平均は 2.4 であった。項目別では、「きょうだい (同胞) とはよく話したり、遊んだりして、仲の良い方だ」、「自分にとってきょうだい (同胞) は尊敬すべき大切な存在である」に B は「あてはまる」、「非常によく当てはまる」と回答している。その一方で、同因子を構成する項目である「自分の結婚にきょうだい (同胞) の同意が必要だと思う」、「進路選択や就職選択の際には、きょうだい (同胞) のことも考える」、「きょうだい (同胞) と一緒に、お互いを高めあいながら生きていきたい」に、B は「あてはまらない」と回答している。このことから、B は、現在同胞との関わりや、同胞の存在について肯定的に捉えている反面、B 自身の将来に関する選択や決定、将来にわたって同胞と高めあうことについては、影響を受けていないと回答する様子が見られた。

第 2 因子「社会福祉への関心」構成項目群の B の得点平均は 1.7 であり、B の社会福祉への高い関心がうかがわれた。特に「社会福祉に関わる職業に就きたい」に B は「非常によくあてはまる」と回答しており、将来の進路と関連して、社会福祉領域への高い関心を寄せる様子が見られた。

第 3 因子「家族とそれを取り巻く環境との関わり」構成項目群の B の得点平均は 2.4 であった。項目別では「もし家の仕事を継がなければならない場合、自分が継ぎたいと思う」、「自分の家族は地域に受け入れられていると思う」、「きょうだい (同胞) のことについて誰にでも話せる」の 3 項目に「あてはまらない」、「できれば困ったときに、きょうだい (同胞) に対する経済的援助をしたい」、「障がい者に優しい人と結婚したい」の 2 項目に「あ

てはまる」と B は回答している。自分の家族は地域に受け入れられてはおらず、同胞のことについては誰にでも話せるわけではない、という B の様子から、家族を取り巻く環境との関わりについて B は肯定的に捉えられていないのではないかと推測される。一方で、同胞に対する経済的援助をしたいと感じていることや、B 自身の将来の結婚相手に、障がい者に対する理解を求めていることから、家族への将来的な関わりについては意識している様子がうかがわれた。

第 4 因子「就職・進路決定の際のきょうだい（同胞）に対する意識」構成項目群の B の得点平均は 3.3 であった。この回答は HS 群傾向であり、就職・進路決定の際に同胞を意識していない B の様子がうかがわれた。項目別では「職業に就く際、きょうだい（同胞）の職種などが気になる」、「自分ときょうだい（同胞）の進学・就職がお互いに影響しあうと思う」に B は「まったくあてはまらない」と回答しており、自身の就職・進学を決定する段階においては、同胞をまったく意識しない様子であった。しかし「きょうだい（同胞）が社会的に低い職業に就いた場合、抵抗を感じる」に B は「あてはまる」と回答しており、同胞の就職や職業について意識している B の姿もうかがわれた。

第 5 因子「家族とのつながり」構成項目群の B の得点平均は 2.3 であった。項目別では「家族の絆は強い方だ」、「地元で就職したい」に「あてはまる」、「結婚しても、親やきょうだい（同胞）の近くに住みたい」に「あてはまらない」と B は回答している。家族との強いつながりを感じ、地元での就職を希望しつつも、結婚後は物理的に原家族と一定の距離を保ちたいと考える B の様子がうかがわれた。

○考察

B は同胞の影響について、B 自身の成長を促してくれる存在であり、現在の同胞との関わりを肯定的なものとして捉えている一方で、将来に関する選択や決定、将来的な同胞との関わりについては影響を受けないと感じており、同胞との将来の関わりについて、これまでと違った関わりを意識する B の様子がうかがわれた。このことは、結婚後、原家族とは物理的に一定の距離を保ちつつも、同胞に対する将来的な金銭的援助を行いたいと考える B の様子からもうかがわれた。B の質問紙の回答は、将来にわたって物理的にも精神的にも一定の距離を保ちたいという様子がうかがわれる。この B の姿は、尊敬できる存在としての同胞を認め、これからはお互いの人生を尊重しながら生きていきたいという B の思いであると推測される。その一方で、自立に向かうこれからの B の人生に、同胞からの影響を受けたくないという思いであるとも考えられる。将来の同胞に対する金銭的援助について、B が前者のような思いを抱いているとすれば、金銭的援助は家族を思いやる B の支援であると考えられるが、後者のような思いでいるとすれば、金銭的援助は義務や役割として捉えている可能性が推測され、FIT で表現された B の位置も、B 自身が納得している位置ではなく、その位置に自分が居らざるを得なかった結果であると推測される。

また、B は家族に対する満足度を 70 点と評価している。この評価は、質問紙で見られた

家族の絆の強さや、FIT で表現された、家族成員とのつながりの強さと関連することが推測される。FIT に関する自由記述では、より満足できる家族にするために、父と次子をつなぐりを強化することが必要であると述べていることから考えると、父と次子をつなぐりを強化することで、自身の負担を軽減したいと B が考えていることが予想される。一方で、より満足するために、家族の絆やつながりを強化したいと B が考えているとすれば、家族の誰とも強いつながりがない父を、一番つながりが弱い同胞とつなげることで、家族の絆をいっそう強いものにしたいという B の思いが表現されたとも考えられよう。

さらに、B の作成した FIT では、B は母のほうを向いていることから、B は母に関心をむけていると思われる。この家族で、母が次子の介助の中心的な役割を担っているとすれば、父と次子をつなぐりを強化することで、母の負担を軽減したいという B の思いであることも予想される。さらに、B の同胞への経済的援助についての指向性は、障がい者支援の活動に一生懸命であると思われる母とのつながりの強さからくるものであるとも考えられる。つまり、B は同胞とのかかわりについて、母から影響を強く受けていることが、一つの仮説として提起できよう。

事例 C

<障がいのあるなしにかかわらず，同胞を含むきょうだいとの関係を保っていると推測される事例>

○ 依頼

依頼は研究者が調査依頼をした障がい者施設を通じて行った。

○ 家族構成

父 (40代)・母 (50代)・長子 (調査協力者，女，20代，以下 C と表記する)・次子 (障がい者，女，20代)・三子 (男，20代)・末子 (女，10代)

現在，父，母，次子，末子が同居している。

○ FIT 分析

(A) 夫婦シール

- ・位置：ナナメ (父右上)
- ・向き：直角。父は C を見，母は末子を見ている。
- ・結びつき：強い
- ・パワー：父 5，母 4

(B) 子シール

C	次子	三子	末子
・夫婦軸への向き：平行に近い	垂直	平行	垂直
・パワー：2	2	2	3
・夫婦軸との関係：上下なし	上下なし	夫婦軸が上	上下なし

(C) 全体

- ・夫婦間距離／親子間距離

父－母：7.5 母－C：4 C－次子：6

父－C：8.5 母－次子：3

父－次子：5.5

- ・占有率：40%
- ・世代間境界

引けない

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

C 次子軸：垂直

C 末子軸：平行

C 長男軸：垂直

FITに関する自由記述

1、シールを貼った順番

父，母，末子，次子，C，三子

2、FITを作成したときにきょうだいについて感じたことや、思い浮かんだイメージ

次子：いつもにこやか。末子より影響力は薄い

末子：とても元気で活発，よくしゃべる，影響力が大きい

三子：一緒に生活していないのであまり良くわからない

3、家族についての満足度 70点

4、より満足できる家族になるために、どこを変化させるか

夫婦間のつながり（お互いの理解）の強化。両親の同居している二人へのつながりを強化，私にとっての安心感，自己肯定感に繋がると思う。

特記事項：弟は長いこと一緒に生活しておらず，あまり家族でいることも少ないため，関係性が不明。

○ 位置解釈

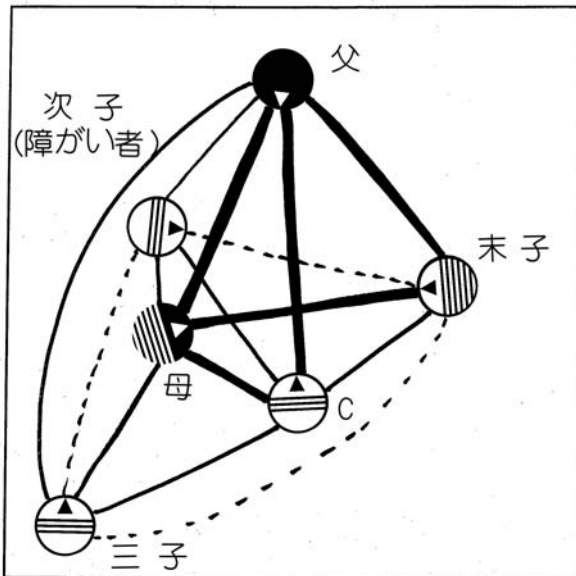


図2：Cの作成したFIT

まず，父母シールに注目する。Cは父シールを上，母シールを下に配置した。柴崎ら（2001）によれば，シールの上部に配置した家族メンバーほど強い・偉いと作成者は感じていることが示唆されている。Cの作成したFITも，父シールが他のどの家族メンバーよりも上部に配置されており，加えてパワーイメージも5で最も強い。シールを貼った順番も父シールが最初であることから，Cにとって父親の存在は家族の中で大きく，強いと感じていることがうかがわれる。また，母シールのパワーイメージは4で，父の次に母のパワーが強い

とCはイメージしている。父シールの向きは，Cシールと向き合う形になっている。母シールは末子と向き合う形になっている。父母の結びつきは強いと表現されているが，FIT作成後の自由記述で，Cは「(よりよい家族にするために) 夫婦間のつながり（お互いの理解）の強化」と記述している。さらに「(そのことは) 私にとっての安心感，自己肯定感に繋がると思う」とも記述していることから，現在の父母間の相互理解やつながりは，Cにとって安心感や自己肯定感を十分に得られるものではないことが示唆される。

Cのシールは母親に接近し，両親とのつながりは強く表現された。パワーイメージは2

で、2番目に弱く表現された。CはCと同胞を含むきょうだいとのつながりをふつうと表現したが、他のきょうだい同士とのつながりはわからないと表現した。これは、Cが家族と離れて暮らしているという物理的な条件が影響していることも考えられるが、C以外のきょうだい同士の接触があまり無いことを表しているのかもしれない。

きょうだいの中で一番パワーが強くと表現されたのは末子であり、パワーイメージは3と表された。末子は、現在小学生で、他のきょうだいと比べて一人だけ年齢が離れていることもあり、まだまだ母の手がかかる年齢であるとうかがわれる。これは、母と末子が向き合い、かつ、つながりが強いとCが表現していることから推測できる。一方で、障がい者である次子は、Cと同じくパワーイメージを2と表現された。両親、Cと次子とのつながりはふつうであるが、他の兄弟姉妹とのつながりはわからないとCは表現した。このことについて、CはFIT作成後の感想で「次女はあまり発言しないため、はたから見ていただけではつながりは把握できない」と記述している。三子については「長いこと一緒に生活しておらず、あまり家族でいることも少ないため、関係性が不明」とCは欄外に特記している。三子のシールは家族の輪から一人だけ離れた、枠の左角に配置された。三子は一人上を向いており、パワーイメージはCと同じ2と表現された。

三子を除いた5名は輪になり、それぞれが内側を向いている。このことについて、Cは「よい形ではないかと思う」と感想を記述している。Cは現在の家族の満足度を70点と表記した。

○ 役割解釈

第1因子「きょうだい（同胞）からの影響」構成項目群のCの得点平均は3であった。項目別では「自分の結婚にきょうだい（同胞）の同意が必要だと思う」にCは「まったくあてはまらない」と回答し、自分の結婚に関して同胞からの影響を受けない、または受けたくないと感じている様子うかがわれた。また、「自分にとってきょうだい（同胞）は尊敬すべき大切な存在である」にCは「あてはまる」と回答し、同胞を含むきょうだいの存在を肯定的にとらえている様子うかがわれる。一方でその他の項目には「あてはまらない」と回答しており、Cは現在の同胞とを含むきょうだいとの関わりを仲がいいとは捉えておらず、将来に関してはお互いを高めあう存在としては位置づけていない様子うかがわれた。

第2因子「社会福祉への関心」構成項目群のCの得点平均は2.3であり、社会福祉領域に対する関心を寄せるCの様子うかがわれた。

第3因子「家族とそれを取り巻く環境との関わり」構成項目群のCの得点平均は2.2であった。項目別では「もし家の仕事を継がなければならぬ場合、自分が継ぎたいと思う」にCは「あてはまらない」と回答し、家業継承には関心を寄せていない様子うかがわれた。同様の回答を示したのは「きょうだい（同胞）のことについて誰にでも話せる」であった。また、「自分の家族は地域に受け入れられていると思う」「できれば困った時にきよ

うだい（同胞）に対する経済的援助をしたい」に C は「あてはまる」と回答しており、家族を取り巻く環境について C は肯定的に捉えている様子や、将来の同胞への支援を意識している様子がうかがわれた。「障がい者に優しい人と結婚したい」に C は「非常によくあてはまる」と回答しており、自分の結婚相手に障がい者への理解を求める様子がうかがわれた。また、C はこの項目の「優しい人」にアンダーラインを引き「ちょっと意味がよくわからないんですけど…」と記述した。このことから、C は結婚相手には、単に優しきで表現されるだけの障がい者への理解を求めていることが推測される。

第 4 因子「就職・進路決定の際のきょうだい（同胞）に対する意識」構成項目群の C の得点平均は 3 であり、HS 群傾向を示した。C は「職業に就く際、きょうだい（同胞）の職種などが気になる」に「まったくあてはまらない」「自分ときょうだい（同胞）の進学、就職がお互いに影響しあうと思う」「きょうだい（同胞）が社会的に低い職業に就いた場合、抵抗を感じる」に「あてはまらない」と回答しており、進学、就職に際して、C は同胞の影響を意識していない様子がうかがわれた。

第 5 因子「家族とのつながり」構成項目群の B の得点平均は 2.7 であった。C は「家族の絆は強い方だ」に「あてはまる」と回答しているが、それ以外の項目には「あてはまらない」と回答しており、家族との物理的な距離を保ちたいという C の姿がうかがわれた。

○ 考察

C は、家族と現在離れて暮らしている。しかしながら、C は自分自身を、三子を除くほかの家族メンバーと接近して FIT に表現している。このことから、C は家族と物理的には離れているが、心理的には近い距離にあると感じていることがうかがわれる。C は、家族に対して心理的なつながりを感じていることがここからは推測される。その一方で FIT 作成後の自由記述で「(よりよい家族にするために)両親の同居している 2 人へのつながりを強化。私にとっての安心感、自己肯定感に繋がると思う。」と記述していることから、現在の家族は、C にとって十分な安心感や自己肯定感を得られる状態でないと C は感じていることが推測される。FIT では C が次子と末子より下に位置し、パワーも弱く表現されている。従来の研究では、四角の上部におかれたものの方が、下部に置かれたものよりも優位にあることが確認されている（亀口,2003）ことから、C は同胞・きょうだいを含む家族を C よりも優位であると感じていると考えられる。また、C が優位であると感じていることは、質問紙調査でうかがわれた、同胞を含めたきょうだいの存在を C が肯定的に捉えていることと関連があるとも考えられる。

また、C は、きょうだいの影響をあまり受けていないと感じていることが質問紙からうかがわれた。FIT では、C はきょうだいとのつながりは両親ほど強くないと感じていることから、C がきょうだいからあまり影響を受けないと感じていることは了解できそうである。このことは、C が、自身の進路や結婚について、きょうだいから影響を受けたくないと感じているとも考えられる。しかし、C は障がい者であるなしにかかわらず、きょうだい・同胞

を C を中心として等しい位置関係に配置した。このこととあわせて考察すると、C はきょうだいを特別視することなく、他の同胞と同じ心理的な距離感や、つながりの強さできょうだいをイメージしていることが推測される。

事例 D

＜家族と強いつながりを実感しておらず、現在考える将来の家族・同胞との関わり方に非一貫性を感じている事例＞

○ 依頼

依頼は、某市にある特別支援学校を通じて行った。

○ 家族構成

父（50代）・母（50代）・長子（調査協力者。以下 D とする。男，20代）・次子（障がい者，男，10代）現在，全員が同居している。

○ FIT 分析

(A) 夫婦シール

- ・位置：タテ（父上）
- ・向き：直角。両親ともに次子を見ている。
- ・結びつき：ふつう
- ・パワー：父 4，母 5

(B) 子シール

- | | 長子 | 次子 |
|----------------|----|------|
| ・夫婦軸への向き：直角に近い | | 垂直 |
| ・パワー：3 | | 2 |
| ・夫婦軸との関係：上下なし | | 上下なし |

(C) 全体

- ・夫婦間距離／親子間距離（単位：cR）
- 父－母：5 母－長子：7.5 長子－次子：4.5
父－長子：6 母－次子：6
父－次子：8
- 第4章 占有率：13%
第5章 世代間境界
引ける

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

長子次子軸：平行

FIT に関する自由記述

1、シールを貼った順番

母，父，長子，次子

2、FITを作成したときにきょうだいについて感じたことや、思い浮かんだイメージ

この家族では一番弱いかなぐらい。

3、家族についての満足度 30～40点

4、より満足できる家族になるために、どこを変化させるか

父と自分から見てれば、母の怒りっぽさがバラバラにしかねてると思う。

○位置解釈

シールを最初に貼ったこと、パワーが一番強いことから、Dは家族の中で母をとて意識していることがうかがわれる。FIT作成後の感想の中でも「改めて、母の強さを確認した。最近はその言動が弟（次子）にも影響している気がする」と記述しており、Dは母の影響力の強さを実感していると思われる。Dが母のほうを向いていることから、Dの母に対する関心の高さがうかがわれる。

父のパワーは4で、母より弱いですが、位置は母の真上である。柴崎ら（2001）の研究では、枠内の上部に置かれたシールほど、強い・偉いという意味合いを含んでいるこ

とが多いということが明らかになっていることを踏まえれば、実際に目に見える影響力は母の方が強いとDは感じているが、Dは父の強さを感じていることも推測される。また、家族全体を見渡す父の役割が、FITに反映されたとも考えられる。一方で、母のパワーが強いこの家族において、家長である父を強い・偉いという意味合いを含む位置におくことで、Dは父性的な父親像をイメージしていることもうかがわれる。

父と同じ高さにDは自分のシールを張っている。FIT作成後のアンケートでDは「（より満足できる家族になるために）父と自分から見てれば、母の怒りっぽさがバラバラにしかねてると思う。」と、記述しており、自分と父は同じ目線で家族を見ているという、Dの家族の様子がうかがわれる。さらに、Dは父と同じ目線で家族を見ることで、自分を父と同じ役割を担うことを意識しているとも考えられる。

次子のシールは、家族の中で一番弱く表現された。配置もDの真下に配置している。Dは、FITを作成したときにきょうだいについて感じたことや、思い浮かんだイメージについて、「この家族では一番弱いかなぐらい。」と記述していることから、日常生活の中でも弟

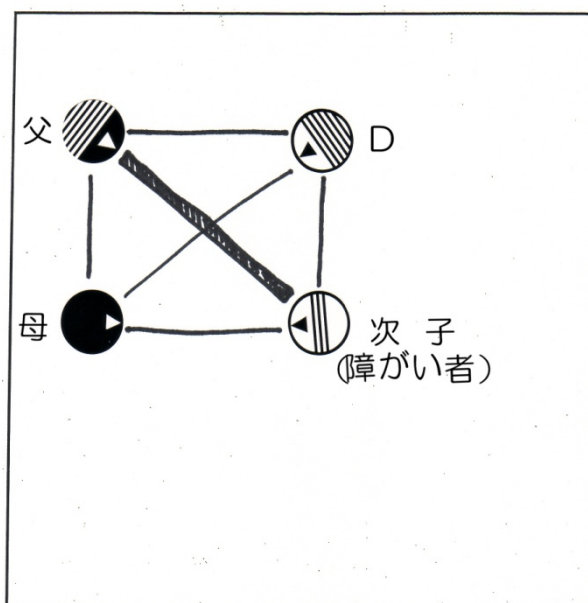


図3：Dの作成したFIT

のパワーの弱さを実感していることがうかがわれた。

○役割解釈

第1因子「同胞からの影響」構成項目群のDの得点平均は、2.4であった。HS群、NHS群の平均値に近い得点であり、評定段階としても中位に位置するものである。項目別では、「きょうだい（同胞）は自分にとって尊敬すべき大切な存在だ」、「進路選択や職業選択の際には、きょうだい（同胞）のことも考える」、「自分の結婚にきょうだい（同胞）の同意が必要だと思う」に、Dは「あてはまる」と回答している。Dは、同胞を尊敬すべき大切な存在として、認識している様子、また、将来、D自身が進路や就職を選択する段階で、同胞に配慮した選択をする様子や、結婚を認めてもらう段階においても、同胞の同意という形での影響を意識している様子がうかがわれた。その一方で、「きょうだい（同胞）とはよく話したり、遊んだりして、仲のいいほうだ」、「きょうだい（同胞）と一緒に、お互いを高めあいながら生きていきたい」に、Dは「あてはまらない」と回答している。このことから、将来における同胞からの影響を認めつつも、現在の同胞との関わりや、将来にわたって同胞と高めあうことについては、影響を意識していないDの様子がうかがわれた。

第2因子「社会福祉への関心」構成項目群のDの得点平均は、2.3であった。項目別では「ボランティア活動をしたい」、「社会をよくするための努力をしたい」にDは「あてはまる」と回答し、「社会福祉に関わる職業に就きたい」に「あてはまらない」と回答している。社会的な関心事として、社会福祉への関心を寄せるDの姿をうかがい知ることにはできるものの、それを自分の仕事とするほどではないと考えていることが推測された。その一方で、Dはすでに社会人であり、社会福祉への関心はあるものの、現在の仕事を变えてまで社会福祉に関わろうとはせず、現在自分ができうる範囲内で、社会福祉に携わりたいという思いが回答に反映されたことも推測される。

第3因子「家族とそれを取り巻く環境との関わり」構成項目群のDの得点平均は、2.2であった。得点平均はHS群傾向が見られたが、因子を構成する項目群でのDの回答にはばらつきが見られた。項目別では「できれば困ったときにきょうだい（同胞）に対する経済的援助をしたい」、「障がい者に優しい人と結婚したい」にDは「非常によくあてはまる」と回答している。同胞に対する経済的な援助が必要になった場合、Dは自分がそれを請け負いたいと考えている様子や、それに伴い、自身の結婚相手には障がい者への理解を求めようとする様子がうかがわれた。しかしながら、「きょうだい（同胞）のことについて誰にでも話せる」にDは「あてはまらない」と回答していることから、Dの同胞に対する経済援助意識の高さは、同胞に対する将来の支援を背負い込んでしまっていることからくることも推測される。また、「自分の家族は地域に受け入れられていると思う」にDは「あてはまる」と回答しており、同胞を含めたDの家族は、地域から疎外されることなく、一定程度の理解を示されているとDは認識していると考えられる。「もし、家の仕事を継がなければならない場合、自分が継ぎたいと思う」にDは「まったくあてはまらない」と回答しており、家

業継承に対する関心の低さがうかがわれた。

第4因子「就職・進路決定の際のきょうだい（同胞）に対する意識」構成項目群でのDの得点平均は2.5であり、HS群に属しながらも、Dの回答はNHS群傾向であることがうかがわれた。項目別では、「職業に就く際、きょうだい（同胞）の職種などが気になる」、「自分ときょうだい（同胞）の進学、就職がお互いに影響しあうと思う」にDは「あてはまらない」と回答しており、これはHS群の回答の特徴を示している。一方で「きょうだい（同胞）が社会的に低い職業に就いた場合、抵抗を感じる」にDは「あてはまる」と回答している。このことから、Dは自分自身の進学・就職を決定する際には同胞のことを意識しないが、同胞自身の就職については意識する様子うかがわれた。

第5因子「家族とのつながり」構成項目群のDの得点平均は、1.6であり、NHS群傾向が見られた。項目別では「地元で就職したい」、「結婚しても親やきょうだい（同胞）の近くに住みたい」にDは「非常によくあてはまる」と回答しており、「家族の絆は強い方だ」に「あてはまらない」と回答している。このことから、地元で働き、D自身が結婚したあと、両親や同胞と物理的に近い距離にいたいというDの様子がうかがわれる一方で、現在の家族との心理的な距離は近いものではないと感じているDの様子もうかがわれた。

○考察

質問紙からは、同胞に対する将来の支援を強く望む一方で、現在の家族や同胞との関わりに、親密さを感じられないDの様子がうかがわれた。Dは、FITの中で同胞を一番パワーが弱い存在として表し、同胞を守るべき存在として表現することで、同胞の存在を受け止めようとしていると推測される。同胞をかけがえのない存在として尊重する一方で、これからの同胞との関わりにおける自己の成長を望んではいないことから、今後は同胞を守り、支援する立場であるという役割の認識が大きくなっていることも考えられる。また、Dは自分を父と同じ高さにおくことで、これまで父が担ってきた社会的に次子を支援する義務を負っていると表しているとも考えられる。質問紙でも見られた、同胞に対する金銭的援助に対する意識の高さは、父の姿から影響されているとも考えられる。

DはFITで母のパワーを一番強く表現した。自由記述からも、母に対する影響力の強さをDが認識していることがうかがわれる。一方でその影響力の強さは、Dにとってはネガティブに捉えられていることも自由記述から見て取れる。「父と自分から見てれば、母の怒りっぽさがバラバラにしかねてると思う。」とDが記述していることから、その影響力をDと父が問題視している様子もうかがわれた。

この家族では、父と次子とのつながりだけが強いと表現された。母は家族の中で強い影響力を持ち、次子にその影響を与えており、父は次子とのつながりを強くすることで、家族の中での均衡を保っているとDは捉えているのかもしれない。つまり、母と次子との関係が緊張関係になると、父が次子とつながりを強くすることで緊張を緩和していると推測される。これは、十島（2006）が指摘する、母子共生関係の結果としての三角関係である

と考えられる。

事例 E

<家族との強いつながりを感じ、将来にわたって精神的なつながりを保持したいと考えている事例>

○ 依頼

依頼は特別支援学校を通じで行った。

○ 家族構成

父 (50代)・母 (40代)・長子 (男, 10代)・次子 (調査協力者, 女, 10代, 以下 E と表記する), 末子 (男, 障がい者, 10代)

現在, 長子以外の全員が同居している。

○ FIT 分析

(A) 夫婦シール

- ・位置: ヨコ (父左)
- ・向き: 直角。父は母を見, 母は末子を見ている。
- ・結びつき: 強い
- ・パワー: 父 5, 母 5

(B) 子シール

	長子	E	末子
・夫婦軸への向き:	垂直	垂直	垂直
・パワー:	1	3	5
・夫婦軸との関係:	下	下	下

(C) 全体

・夫婦間距離/親子間距離

父-母: 9.5 母-長子: 12.5 長子-E: 6.5

父-長子: 9 母-E: 6 長子-末子: 9

父-E: 7.5 母-末子: 9 E-末子: 5.5

父-末子: 13

・占有率: 38%

・世代間境界

引ける

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

長子 E 軸: ナナメ

長子末子軸: 平行

E 末子軸：ナナメ

FIT に関する自由記述

1、シールを貼った順番

母，末子，自分，長子，父

2、FIT を作成したときにきょうだいについて感じたことや、思い浮かんだイメージ

家族全員，同じくらい，一人いないだけで雰囲気が変わるという影響力を持っていると思う。父は気分屋というのもあり，シールを貼るのにすごく迷った。

3、家族についての満足度 90 点

4、より満足できる家族になるために、どこを変化させるか

一人一人，自分の都合で行動してしまったりわがままを言ったりすることが，時々たまにあって，それを改善できたら，そのわがままを抑えて，相手に譲るやさしさが生まれ，また同時に相手感謝する気持ちが生まれて，さらに家族の絆が深まると思う。

○ 位置解釈

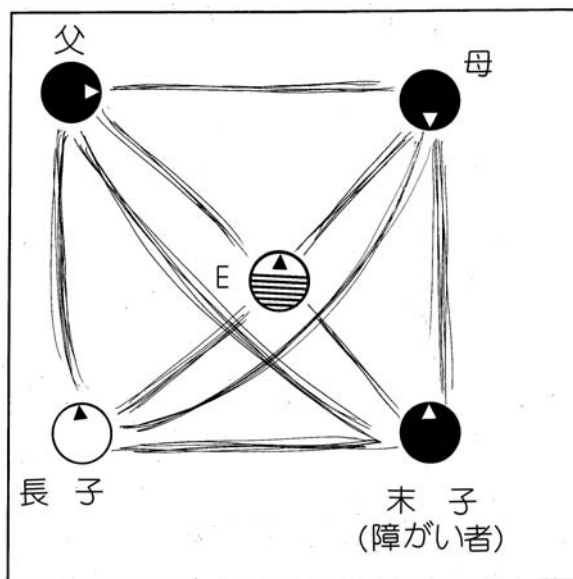


図 4：E の作成した FIT

この形の FIT は親世代シールが子世代シールより上に位置する「親世代優位型」である。このような形は，亀口（2003）の指摘するように，伝統的な家族観と言えるかもしれない。

E は最初に母親シールを貼り，パワーを一番強く表現した。その母親シールと向かい合う形で障がい者である末子シールが貼られた。末子のパワーイメージも一番強く表現された。他の事例でも，母親と障がい者である同胞が向き合う形で FIT が表現されている事例が見受けられる。E の事例においても，日常生活の中で母親が同胞をよく見ていたり，介助をするという行為

がよく目に付き，E に意識されているのだろう。

父親シールは上左隅に一番強いパワーで表現され，向きは母親のほうを向いていた。FIT を作成したときに思い浮かんだイメージとして「父は気分屋というのもあり，シールを貼るのにすごく迷った」と E は記述し，また，より満足できる家族にするために「一人一人，自分の都合で行動してしまったりわがままを言ったりすることが，時々たまにあって，それを改善できたら，そのわがままを抑えて，相手に譲るやさしさが生まれ，また同時に相手感謝する気持ちが生まれて，さらに家族の絆が深まると思う。」とも記述していることか

ら、父の影響力の強さは、気分屋である、というところに起因する可能性がある。しかし一方で、親世代と子世代を上下で明確に分けて表現したことから、気分屋ではあるものの、家長としての父性をイメージした父親像が表現された可能性もある。

長子シールは左下角に配置され父親の方を向き、パワーが一番弱く表現された。FIT 作成したときに思い浮かんだイメージとして E は「家族全員、同じくらい、一人いないだけで雰囲気が変わるという影響力を持っていると思う。」と記述してはいるが、長子は既に家を離れており、物理的に長子が不在の状況がこの家族の中で日常になっていることから、E はパワーが一番弱く表現したことが考えられる。しかし、長子よりも E の方が上部に配置されたことから、E は長子よりも優位な存在であると認識していることも考えられる。長子のパワーの弱さは、E が長子よりも優位であるということの一つの表現とも考えられる。

E のシールは父・母・長子・末子シールで囲まれた四角形のほぼ真ん中に配置し、向きは夫婦軸の中心を向き、パワーイメージは 3 と表現された。長子・E・末子の中では、E のシールが両親に一番近く配置された。このことから、E は兄弟姉妹の中で誰よりも両親と心理的距離が近いと認知していることがうかがわれる。また、家族全員の結びつきが強いと認知していることも、E の家族に対する満足度を 80 点と高めていると考えられる。

○ 役割解釈

第 1 因子「きょうだい（同胞）からの影響」構成項目群の E の得点平均は 2.4 であった。項目別では「自分の結婚にきょうだい（同胞）の同意が必要だと思う」に「あてはまらない」「進路選択や職業選択の際には、きょうだい（同胞）のことも考える」に「まったくあてはまらない」と E はと回答し、自分の結婚や、進学・就職に関して同胞からの影響を受けない、または受けたくないと感じている様子うかがわれた。一方で「自分にとってきょうだい（同胞）は尊敬すべき大切な存在である」に「非常によくあてはまる」、「きょうだい（同胞）と一緒に、お互いを高めあいながら生きていきたい」「きょうだい（同胞）とはよく話したり、遊んだりして、仲のいい方だ」に E は「あてはまる」と回答し、同胞の存在を肯定的にとらえ、将来にわたってお互いを高めあう存在、尊敬すべき大切な存在として同胞をとらえている様子うかがわれる。

第 2 因子「社会福祉への関心」構成項目群の E の得点平均は 1.6 であり、将来希望する職業領域と関連して、社会福祉領域に対する関心を寄せる E の様子うかがわれた。

第 3 因子「家族とそれを取り巻く環境との関わり」構成項目群の E の得点平均は 1.2 で NHS 群傾向を示した。項目別では「もし家の仕事を継がなければならぬ場合、自分が継ぎたいと思う」「きょうだい（同胞）のことについて誰にでも話せる」「自分の家族は地域に受け入れられていると思う」「障がい者に優しい人と結婚したい」に E は「非常によくあてはまる」と回答しており、自分の家族を取り巻く環境に対して、受け入れられていると実感していること、また、同胞を含むきょうだいのことを話すことに抵抗を感じていないこと、さらに自分の結婚相手に障がい者への理解を求める様子うかがわれた。このことから、E

は、同胞や家族への周囲からの視線を気にする様子はどうかがわれず、むしろ同胞を含めた家族と周囲の環境との関係を良好であると感じていると考えられる。また、家業伝承に関しても積極的である様子はどうかがわれた。Eは「できれば困った時にきょうだい（同胞）に対する経済的援助をしたい」に「あてはまる」と回答し、前述の項目ほどではないが、同胞に対する将来的な援助を意識する様子はどうかがわれた。

第4因子「就職・進路決定の際のきょうだい（同胞）に対する意識」構成項目群のEの得点平均は4であり、HS群傾向を示した。Eはすべての項目に「まったくあてはまらない」と回答しており、就職・進路決定に際して、同胞を含むきょうだいを全く意識していない様子はどうかがわれた。

第5因子「家族とのつながり」構成項目群のEの得点平均は2.7であった。項目別では「家族の絆は強い方だ」にEは「あてはまる」と回答し、家族のつながりを実感している様子はどうかがわれた。また、「結婚しても、親やきょうだい（同胞）の近くに住みたい」「地元で就職したい」に「まったくあてはまらない」と回答し、結婚や就職に際して、家族と物理的な距離を置きたい様子はどうかがわれた。

○ 考察

Eは家族に対する満足度が90点と高得点で表現した。FITでEは自身を家族の真ん中に配置し、家族全員のつながりを強く表現したことから、Eは家族とのつながりを意識し、家族から守られていると感じている様子はどうかがわれる。また、役割解釈からは、Eの家族との精神的なつながりを保とうとする様子はどうかがわれた。このことは、「(FIT作成後、より満足できる家族にするために) 一人一人、自分の都合で行動してしまったりわがままを言ったりすることが、時たまにあつて、それを改善できたら、そのわがままを抑えて、相手に譲るやさしさが生まれ、また同時に相手を感謝する気持ちが生まれて、さらに家族の絆が深まると思う。」と記述していることから、Eが家族の中で精神的なつながりを大切にしている様子はどうかがえる。

Eは、同胞を含むきょうだいを尊敬すべき大切な存在として捉え、これからもお互いに高めあう存在であることを望む一方で、自分の就職や結婚に際しては、原家族と物理的な距離を保とうとする様子はどうかがわれた。このEの様子は、同胞を含むきょうだいとの精神的なつながりは今後も保ちたいが、物理的には今後も接近していたいことは望んでいないことを表していると考えられる。また、Eは就職や進学に際して同胞を含むきょうだいの影響を全く受けないと回答している。将来的に原家族と物理的に接近していることは、E自身の就職や進学の選択肢が制限されると考えられることから、原家族と物理的な距離を保ちたいと考えていることも推測される。

Eの家族像では、同居している家族の中で父、母、末子のパワーが一番強く、同じ強さで表現された。Eは、末子のパワーをEよりも強く表現した。家族の中でのパワーは末子の方が強いと実感しているが、両親との心理的なつながりが強いことや距離を末子よりも近

いと表現することで、他の家族成員よりも弱いパワーである E が、自身の家族を満足でき、「これからもそんな平和な関係が続けばいいなと思う」と感想をもつことができている可能性がある。

事例 F

<家族の絆が強く、調査協力者が家族成員から関心を向けられている事例>

○ 依頼

依頼は特別支援学校を通じて行った。

○ 家族構成

父 (40代)・母 (40代)・長子 (調査協力者, 女, 10代, 以下 F と表記する)・次子 (障がい者, 男, 10代)

現在, 全員が同居している。

○ FIT 分析

(A) 夫婦シール

- ・位置: タテ (父下)
- ・向き: 直角。父は次子を見, 母は F を見ている。
- ・結びつき: 強い
- ・パワー: 父 5, 母 4

(B) 子シール

- | | F | 次子 |
|----------------|---|------|
| ・夫婦軸への向き: ナナメ | | ナナメ |
| ・パワー: | 3 | 2 |
| ・夫婦軸との関係: 上下なし | | 上下なし |

(C) 全体

- ・夫婦間距離 / 親子間距離

父-母: 7 母-F: 9.5 長女-次女: 7

父-F: 6.5 母-次子: 6.5

父-次子: 9.5

- ・占有率: 20%
- ・世代間境界
引けない

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

F 次子軸: 平行

FIT に関する自由記述

1、シールを貼った順番

父, 母, F, 次子

2、FITを作成したときにきょうだいについて感じたことや、思い浮かんだイメージ

きょうだいについて特に考えなかった。食卓の風景を思い浮かべた。

3、家族についての満足度 80点

4、より満足できる家族になるために、どこを変化させるか

変わらない

○ 位置解釈

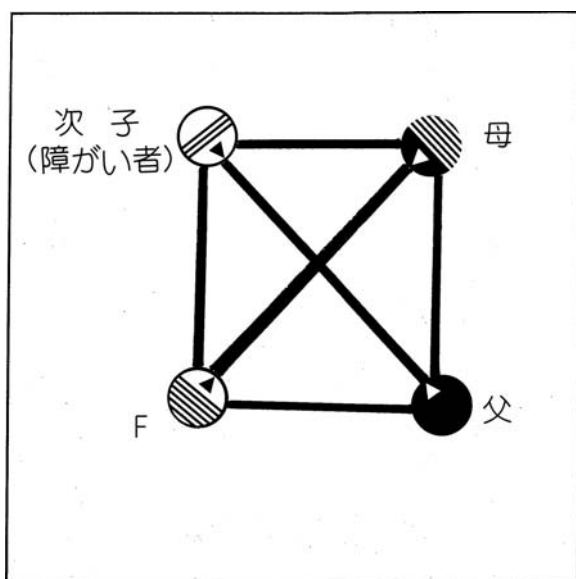


図5：Fの作成したFIT

Fが描いた家族像は、親世代と子世代が左右に並列する、親子並列型であり、高校生の標準的な家族イメージ(亀口,2003)である。

この家族像では、父のパワーイメージが5と一番強く、次いで母のパワーイメージが4と表現され、家族内における両親のパワーの強さを、Fが実感していることが示唆された。また、父は母の真下に位置されたが、パワーイメージは父の方が強く、Fは家長としての父性的な父のパワーの強さを感じていると推測される。

この家族像の中で、Fの位置は、四角形で描かれた家族像の左下である次子の真下に

配置された。従来の研究では、四角の上部におかれたものの方が、下部におかれたものよりも優位にあることが確認されている(亀口,2003)ことから、Fは、自分よりも次子の方が優位であると認知していることがうかがわれる。その一方で、パワーイメージは次子よりもFの方が強く表現されたことから、Fは、この家族の中においては、パワーという点で次子よりも優位であると認知していることが示唆される。これは、実生活において、家族での見守りや介助を必要とする次子を、Fは優位な立場であると認知してはいることを表現していると考えられる。そういった家族内での目に見える接触やかかわりについては、次子よりは優位でないとしても、発言力や影響力に代表される、自身のパワーの強さを家族内で発揮できる位置であることが推測される。

また、この家族像は、すべての家族成員のつながりが強いと表現されたこと、母とF、父と次子が向き合うようにシールが配置されたことが特徴的であると言えるだろう。特に、家族成員の向きに関しては、最も距離が遠い者同士、同性同士が向き合う形になっている。Fは、FIT作成後の感想に「家族みんな仲が良く、円満な家庭だと思う。」と記述している。さらに、家族に対する満足度は80点であった。こうしたFの実感には、家族成員のつなが

りが強いことや、家族の中で誰かが自分のことを見てくれているという認知に基づく安心感からくるものであると考えられる。

○ 役割解釈

第1因子「きょうだい（同胞）からの影響」構成項目群のFの得点平均は2.4であった。項目別では「自分の結婚にきょうだい（同胞）の同意が必要だと思う」「進路選択や職業選択の際には、きょうだい（同胞）のことも考える」にFは「あてはまらない」と回答し、自分の結婚や、進学・就職に関して同胞からの影響を受けない、または受けたくないと感じている様子うかがわれた。また、「自分にとってきょうだい（同胞）は尊敬すべき大切な存在である」「きょうだい（同胞）と一緒に、お互いを高めあいながら生きていきたい」「自分にとってきょうだい（同胞）は尊敬すべき大切な存在である」にFは「あてはまる」と回答し、同胞の存在を肯定的にとらえ、将来にわたってお互いを高めあう存在として同胞をとらえている様子うかがわれる。

第2因子「社会福祉への関心」構成項目群のFの得点平均は2であり、社会福祉領域に対する関心を寄せるFの様子うかがわれた。

第3因子「家族とそれを取り巻く環境との関わり」構成項目群のFの得点平均は2.4であった。項目別では「もし家の仕事を継がなければならない場合、自分が継ぎたいと思う」にFは「あてはまらない」と回答し、家業継承には関心を寄せていない様子うかがわれた。同様の回答を示したのは「きょうだい（同胞）のことについて誰にでも話せる」であった。また、「自分の家族は地域に受け入れられていると思う」「できれば困った時にきょうだい（同胞）に対する経済的援助をしたい」「障がい者に優しい人と結婚したい」にFは「あてはまる」と回答しており、家族を取り巻く環境について肯定的に捉えている様子や、将来の同胞への支援を意識している様子うかがわれた。それに伴い、自分の結婚相手に障がい者への理解を求める様子うかがわれた。

第4因子「就職・進路決定の際のきょうだい（同胞）に対する意識」構成項目群のFの得点平均は3であり、HS群・NHS群の中間に位置する回答を示した。Fは「職業に就く際、きょうだい（同胞）の職種などが気になる」「自分ときょうだい（同胞）の進学、就職がお互いに影響しあうと思う」「きょうだい（同胞）が社会的に低い職業に就いた場合、抵抗を感じる」に「あてはまらない」と回答しており、進学、就職に際して、Fは同胞の影響を意識していない様子うかがわれた。また、「親戚づきあいを深くしていきたい」にFは「あてはまる」と回答している。

第5因子「家族とのつながり」構成項目群のBの得点平均は2であった。Fはすべての項目に「あてはまる」と回答しており、現在の家族の絆を強いものと実感していること、また、自分の進路・結婚後も物理的に近い距離にいたいというFの様子うかがわれた。

○ 考察

Fは、家族の絆が強いと実感していることがFIT・質問紙からうかがわれた。Fは、同胞を家族内で優位な立場であると認知しているが、パワーイメージは同胞よりも強い。Fは同胞への経済的援助や同胞とお互い高めあいながら生きていきたいといった展望は、このパワーイメージの強さに関連すると推測できる。つまり、立場的には同胞の方が優位であるが、家族内における力はFの方が強く、それゆえ、将来の同胞関係を左右する主導権を持ちやすいと考えられる。この家族像においては、家の先導役として元来位置づけられてきた父が、パワーを持ちつつも母の下に位置することと、Fの姿が類似していると考えられ、「縁の下の力持ち」として、父と自己を位置付けているとも推測される。

質問紙調査で、HS群・NHS群間で有意差が認められた第4因子では、FはHS群・NHS群のどちらの特徴も示さなかった。第4因子を構成する項目群のうち、同胞に対しては意識していないと回答しているが、親戚づきあいについてはこれから深くしていきたいと回答している。このことは、進路・結婚について同胞の影響を受けないが、将来的な同胞の支援を自分だけで完結せず、親戚まで広げたいという思いが反映されたと考えられる。また、将来的な支援にかかわらず、現段階でも家族以外の人も巻き込んで支援をしていきたいという思いであるとも考えられる。

Fの家族に対する満足度は80点と高い。これは、FITで表現されたように、Fが家族のつながりが強いと感じていることが関連すると考えられる。Fが作成したFITでは、F自身と母を向きあう形で表現された。Fが関心を向けている人物が、Fに関心を向けていると認知していることからくる安心感と、家族に対する満足度との関連も推測される。また、Fは、特に自分の結婚や、進学・就職に関して同胞からの影響を受けない、もしくは受けたくないと感じている様子が質問紙調査からうかがわれたことから、同胞からの影響を受けず、また、家族の誰かから関心を向けられていることから、確立した自己として家族内に存在できることが家族に対する満足度を高めているとも考えられる。

事例 G

<同胞との間に親密さを感じてはいないが、同胞に対する将来的な援助を意識していると思われる事例>

○ 依頼

依頼は特別支援学校を通じて行った G へは郵送にて調査用紙を配布した。

○ 家族構成

父 (40 代)・母 (40 代)・長子 (障がい者, 男, 10 代)・次子 (調査協力者, 女, 10 代, 以下 G と表記する)・祖母 (80 代)

現在全員が同居している。

○ FIT 分析

(A) 夫婦シール

- ・位置：ナナメ (父ななめ右上)
- ・向き：相反。父は子供たちを見, 母は父を見ている。
- ・結びつき：強い
- ・パワー：父 4, 母 3

(B) 子シール

- | | 長子 | G |
|-------------|----|----|
| ・夫婦軸への向き：直角 | | 相反 |
| ・パワー： | 2 | 3 |
| ・夫婦軸との関係：下 | | 下 |

(C) 全体

- ・夫婦間距離／親子間距離

父－母：5.7 母－長子：11 長子－G：10

父－長子：10.3 母－G：6.5

父－G：10.3

- ・占有率：37%
- ・世代間境界

引ける

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

長子 G 軸：ナナメ

FIT に関する自由記述

1, シールを貼った順番

父, 母, G, 長子, 祖母

2, FIT を作成したときにきょうだいについて感じたことや, 思い浮かんだイメージ

無回答

3, 家族についての満足度 20 点

4, より満足できる家族になるために, どこを変化させるか

無回答

○ 位置解釈

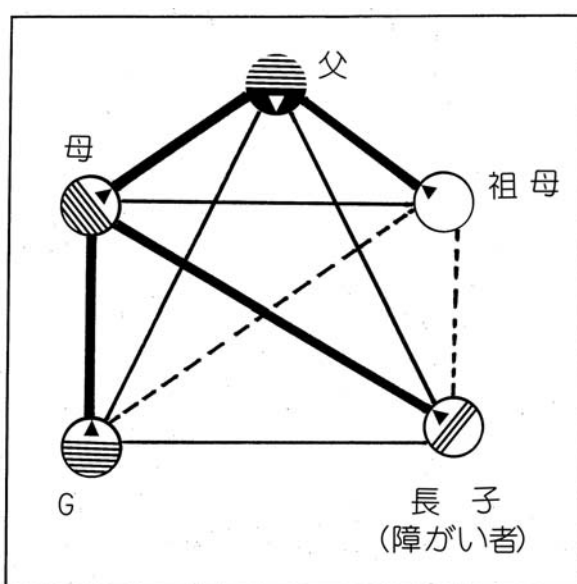


図 6: G の作成した FIT

親世代と子世代が明確に分かれている家族像である。父親が家族像の一番上に位置し、パワーも一番強いこと、父の下に母、祖母を位置させていることから、亀口（2003）が述べる伝統的な家族体系に近い形であると考えられる。父に次いでパワーが強いと表現されたのは母と G で、2 人のパワーは同等と表現された。しかしながら、G は自身を母の真下に配置していることから、養育者としての母の役割を意識していると考えられる。母と G の次にパワーが強いと表現されたのは長子であった。

G は自身と長子を同じ高さに配置している

ことから、長子に対して対等であるという認知していると考えられる。また、親世代と子世代を明確に分けて表現している G にとって、年上である長子を、G と同列に並べることは、ケイガン（1971）が指摘する「モデルとしての年上の子ども」として長子を捉えることが困難であると考えていることが推測される。

G は母と結びつきが強く、また、長子に比べて母に近い位置に自身のシールを配置した。このことから、G は、家族の中で、母を最も近い存在であると認知している可能性が示唆される。長子のパワーを G よりも弱くイメージしたことからも、G と母とのつながりが強いことは、G が同胞との関係において、両親から何らかの役割期待を持たれている可能性が考えられる。

G は、家族に対する満足度を 20 点と低く評価した。G は、母の方を向き、母に関心を寄せているが、母は父の方を向いている。親世代で子供の方を向いているのは父親だけであると考えられるが、父親は長子、G とともに距離が離れており、長子、G とは心理的な距離が遠いことがうかがわれるし、心理的なつながりもさほど強いと G は認知していないよう

に見受けられる。このことから、G にとっては、さほど心理的なつながりが強いと感じられない父よりも、心理的なつながりが強く、G 自身が関心を寄せる母に G の方を向いてもらうことの方が、家族に対する満足度を上げることにつながる可能性がある。

○ 役割解釈

第1因子「きょうだい（同胞）からの影響」構成項目群のGの得点平均は3.2であった。項目別では「自分の結婚にきょうだい（同胞）の同意が必要だと思う」に「まったくあてはまらない」と回答し、自身の結婚に関しては同胞の影響を全く受けない、または受けたくないと考えている様子うかがわれた。また、「進路選択や職業選択の際には、きょうだい（同胞）のことも考える」「自分にとってきょうだい（同胞）は尊敬すべき大切な存在である」「きょうだい（同胞）と一緒に、お互いを高めあいながら生きていきたい」「きょうだい（同胞）とはよく話したり、遊んだりして、仲のいい方だ」に「あてはまらない」とGはと回答し、結婚に関することほどではないが、進路選択や職業選択に関しても同胞の影響を受けない、または受けたくないと考えている様子うかがわれた。さらに、これまでの同胞との関係を親密であると捉えている様子うかがえず、将来にわたってもお互いを高めあう存在として同胞と関わり合いたいと考えている様子も見受けられなかった。

第2因子「社会福祉への関心」構成項目群のGの得点平均は2.6であった。Gは、ボランティアや社会向上に関しては関心を示さなかったが、将来希望する職業領域と関連して、社会福祉領域に対する関心を寄せるGの様子うかがわれた。

第3因子「家族とそれを取り巻く環境との関わり」構成項目群のGの得点平均は2.4であった。項目別では「もし家の仕事を継がなければならぬ場合、自分が継ぎたいと思う」に「あてはまらない」と回答し、家業伝承に関して関心を示す様子うかがわれなかった。また、「きょうだい（同胞）のことについて誰にでも話せる」にGは「まったくあてはまらない」と回答し、同胞のことを気軽に話せる存在として捉えていない様子うかがわれた。一方で、Gは「自分の家族は地域に受け入れられていると思う」「できれば困った時にきょうだい（同胞）に対する経済的援助をしたい」に「あてはまる」と回答しており、自分の家族を取り巻く環境に対して、受け入れられていると実感している様子うかがわれた。また、同胞に対する経済的援助を意識している様子うかがわれた。さらに、「障がい者に優しい人と結婚したい」にGは「非常によくあてはまる」と回答しており、自分の結婚相手に障がい者への理解を求める様子うかがわれた。また、家業伝承についても積極的である様子うかがわれた。

第4因子「就職・進路決定の際のきょうだい（同胞）に対する意識」構成項目群のGの得点平均は3であり、HS群傾向を示した。Gはすべての項目に「あてはまらない」と回答しており、就職・進路決定に際して、同胞を含むきょうだいを全く意識していない様子うかがわれた。

第5因子「家族とのつながり」構成項目群のGの得点平均は2.3であった。項目別では

「家族の絆は強い方だ」、「結婚しても、親やきょうだい（同胞）の近くに住みたい」に G は「あてはまる」と回答し、家族のつながりを実感している様子や、結婚後は原家族と物理的に近い距離に住みたいと考えている様子がうかがわれた。一方で「地元で就職したい」には「あてはまらない」と回答し、就職に際しては、家族と物理的な距離を置きたい様子がうかがわれた。

○ 考察

G は、この伝統的な家族体系（亀口,2003）において、次子でありながらも、きょうだい関係の中では長子よりもパワーが強いと認知していることが FIT からうかがわれた。亀口（2003）が示す、一般的な高校生の FIT の事例においても、兄姉が弟妹よりもパワーが弱く表現される事例も見受けられる。この場合、事例 C でも見られたような「弟妹が幼く、まだまだ家族の世話や目がかかるが故に、家族に対して影響力を発揮する」という解釈が当てはまると考えられる。しかし、G は 10 代後半で幼い子どもとは言えないことから、事例 C のような解釈は適用できないであろう。田部井（2006）は、思春期のきょうだいの特徴について「自分のことで精いっぱいであるのかかわらず、自分と障がいのあるきょうだいの両方の将来を考える」と述べている。G も、田部井（2006）の挙げる特徴から、援助する側としての自分と、援助される側の同胞という関係で、同胞との将来を自ら進んで考える点が、パワーに影響したとも考えられる。

しかし、G は、質問紙調査で、これまでの同胞との関係を親密であると捉えている様子はどうかがえず、将来にわたってもお互いを高めあう存在として同胞と関わり合いたいと考えている様子も見受けられなかった。また、G は尊敬すべき大切な存在として同胞を肯定的に捉えていないが、同胞に対する将来的な経済的援助を望むと質問紙調査では回答している。FIT では、G と同胞との心理的なつながりは「普通」と表現され、心理的距離は、G にとっては父と同胞はほぼ同じ距離に位置づけられ、この距離は近いとは捉えづらい。こういった G と同胞との関係において、同胞に対する将来的な経済的援助を望む G は、自らの意思ではなく、周囲から期待された役割である可能性が考えられる。さらに、この役割は、G が家族の中で唯一つながりが強いと表現された、母からの影響であると考えられるし、また、伝統的な家族体系における、権威的な父からの期待であるとも考えられる。前述の事例では、調査協力者が家族の絆を強いと感じており、その家族から望まれた役割を負うことは、調査協力者にとって負担として意味づけられないのではないかと考えられた。しかし、G の家族に対する満足度は 20 点と低く評価され、G にとっては、負わざるを得ない役割であることを認識はしているものの、それを受容する、完全に否定する、または折衷案に落ち着くには至っていない可能性もあろう。こういった、同胞の将来をめぐって、きょうだいがそれとどのように折り合いをつけるかが課題となりそうである。

事例 H

<自らの位置と役割を認識し、その役割を果たすことに意欲的であると推測される事例>

○ 調査依頼

研究者が以前よりボランティアをしていた障がい者支援団体の親の会を通して依頼

○ 家族構成

父（50代）・母（50代）・長子（調査協力者，男，30代，以下，Hと表記する）・次子（障がい者，女，20代）

現在，Hは結婚し，原家族とははなれて暮らしている。父，母，次子が同居している。

○ FIT 分析

(A) 夫婦シール

- ・位置：ナナメ（父左上）
- ・向き：向かい合い
- ・結びつき：強い
- ・パワー：父 5，母 3

(B) 子シール

	H	次子
・夫婦軸への向き：垂直		垂直
・パワー：	4	3
・夫婦軸との関係：夫婦軸より上		夫婦軸より下

(C) 全体

- ・夫婦間距離／親子間距離

父－母：7.6 母－H：4.5 H－次子：7.7

父－H：6.5 母－次子：5.5

父－次子：4.5

- ・占有率：11%
- ・世代間境界
引けない

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

H 次子軸：垂直

FIT に関する自由記述

1, シールを貼った順番

父, H, 次子, 母, H の妻

2, FIT を作成したときにきょうだいについて感じたことや, 思い浮かんだイメージ
妹の年齢, 将来について

3, 家族についての満足度 90 点

4, より満足できる家族になるために, どこを変化させるか
今のところ大きな不満はない。

しいて言えば, 母—妹の結びつきが弱くなっても良いかも

○ 位置解釈

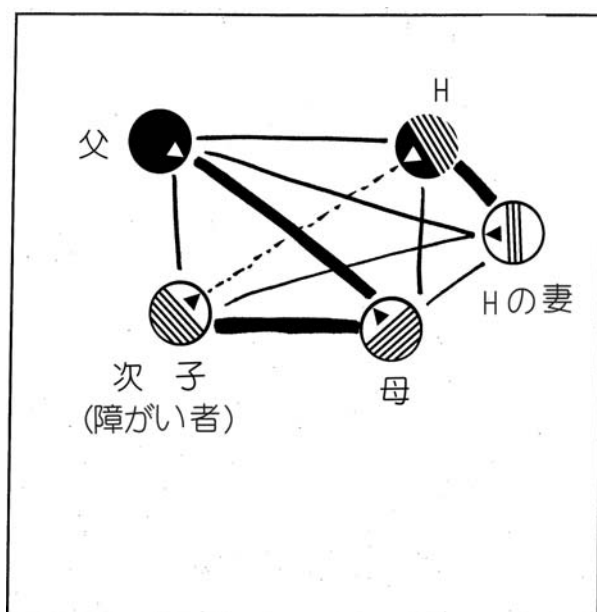


図 7: H の作成した FIT

第二世代である, H の妻までを家族として表現した FIT を作成した。

この家族像では, 父のパワーが一番強く, その次に H のパワーが強いと表現された。また, 父の位置は家族像の中で上部に位置し, H も父と同じ高さ到自己のシールを位置付けた。このことから, H は父と並んで優位な存在であると認知していると考えられる。このことは, H が結婚し, 父と同様に世帯主となったことと関連する可能性もある。

H は, 次子とのつながりを「わからない」と表現した。しかしながら, H は次子と向き合う形でシールを配置し,

次子を気にかけている様子うかがわれる。FIT を作成したときに, きょうだいについて感じたことや思い浮かんだイメージについて, H は「妹の年齢, 将来について」と記述していることから, 年を重ねた両親のもとで暮らす次子の将来を案じている様子うかがわれる。

H の描いた家族像では, 母と次子, 母と父のつながりが強いと表現された。母と次子については FIT 作成後の感想で「家庭内でもっとも結びつきが強いのは, 母—妹と思う」と記述し, さらにより満足できる家族になるために「しいて言えば, 母—妹の結びつきが弱くなっても良いかと思う」と, 母と次子のつながりの強さを少々好ましく感じていない H の様子うかがえる。しかし, H の現在の家族の満足度は 90 点と高く「今のところ大きな不満はない」と記述している。母—次子の結びつきの強さは, 十島 (2006) の指摘する母子共生関係によるものであると推測されるが, それにより父や H が不満を抱き, 問題の温床 (十島,2006) となっている様子うかがわれない。むしろ次子の将来や, 母の老い先を

案じて、結びつきの強さが気になるという様子が推測される。

○ 役割解釈

第1因子「きょうだい（同胞）からの影響」構成項目群のHの得点平均は2.8であった。項目別では「自分の結婚にきょうだい（同胞）の同意が必要だと思う」に「まったくあてはまらない」、「自分にとってきょうだい（同胞）は尊敬すべき大切な存在である」「きょうだい（同胞）と一緒に、お互いを高めあいながら生きていきたい」「きょうだい（同胞）とはよく話したり、遊んだりして、仲のいい方だ」に「あてはまらない」とHはと回答し、自分の結婚や、進学・就職に関して同胞からの影響を受けない、または受けたくないと感じている様子がうかがわれた。さらに、これまでの同胞とのかかわりを親密なものとは捉えておらず、将来にわたっても、お互いを高めあう存在として同胞をとらえていない様子がうかがわれる。一方でにその「進路選択や職業選択の際には、きょうだい（同胞）のことも考える」にHは「あてはまる」と回答しており、進路や職業選択の際に同胞を意識する様子がうかがわれた。

第2因子「社会福祉への関心」構成項目群のHの得点平均は2.3であり、ボランティア活動への関心を示した。Hは現在会社員であるため、職業としての社会福祉領域への関心をむけることは現実的に困難であると考えられ、職業としての社会福祉領域への関心は低かった。

第3因子「家族とそれを取り巻く環境との関わり」構成項目群のHの得点平均は2であった。項目別では「きょうだい（同胞）のことについて誰にでも話せる」にHは「あてはまらない」と回答しており、同胞のことを気軽に話せないことがうかがわれる。また、「もし家の仕事を継がなければならぬ場合、自分が継ぎたいと思う」「自分の家族は地域に受け入れられていると思う」「障がい者に優しい人と結婚したい」にHは「よくあてはまる」と回答しており、自分の家族を取り巻く環境に対して、受け入れられていると実感していること、自分の結婚相手に障がい者への理解を求める様子がうかがわれた。また、家業伝承に関しても積極的である様子がうかがわれた。Hは「できれば困った時にきょうだい（同胞）に対する経済的援助をしたい」に「非常によくあてはまる」と回答し、同胞への経済的援助に対して意欲的である回答を示した。

第4因子「就職・進路決定の際のきょうだい（同胞）に対する意識」構成項目群のHの得点平均は3.5であり、HS群傾向を示した。Hは「職業に就く際、きょうだい（同胞）の職種などが気になる」「自分ときょうだい（同胞）の進学、就職がお互いに影響しあう」に「まったくあてはまらない」と回答し、自分自身の就職・進学に際して、同胞をまったく意識していない様子がうかがわれる。また、「親戚づきあいを深くしていきたい」「きょうだい（同胞）が社会的に低い職業に就いた場合、抵抗を感じる」にHは「あてはまらない」と回答しており、同胞の職種に関して意識していない様子がうかがわれた。また、親戚づきあいを積極的に深くしたいと考えている様子はうかがわれなかった。

第5因子「家族とのつながり」構成項目群のHの得点平均は2.6であった。項目別では「家族の絆は強い方だ」にHは「非常によくあてはまる」と回答し、家族のつながりを強く実感している様子がうかがわれた。また、「結婚しても、親やきょうだい（同胞）の近くに住みたい」に「あてはまらない」、「地元で就職したい」に「まったくあてはまらない」と回答し、結婚や就職に際して、家族と物理的な距離を置きたい様子がうかがわれた。

○ 考察

Hは、障がい者である次子を気にかけている様子が、FIT・質問紙からうかがわれた。Hの次子に対する気かけ方は、見守る、というよりは案ずるに近い印象を受ける。質問紙調査で、職業選択の際に同胞を意識する様子がうかがわれたことや、同胞への経済的援助に対して意欲的である印象を受ける回答を示したことから、Hは同胞とのこれからのかかわり方を、支援者—被支援者として捉えていると推測される。しかし、質問紙調査からは、Hがこれまで同胞と親密なかかわりを持ち、これからもお互いを高めあう存在として捉えていないことから、同胞の支援に対する意欲の高さは、役割意識の高さからくるものであることも考えられる。

しかしながら、その役割は、FITで表現された位置と合致しているとHが認知している可能性があり、その位置と役割は、長男長子であるHの立場であれば、周囲から求められる位置と役割であると考えられる。そのため、そのような役割を担うことに抵抗がないことが、家族の満足度を低いと感じないことと関連することが推測される。また、物理的に距離を置くことを余儀なくされたHの、責務として同胞への支援を強く意識していると考えられる。しかし、Hは、親戚づきあいについては意欲を示さず、同胞の支援を親族以外に求めようとしているか、もしくは、自分自身で行いたいと考えていることも考えられ、同胞の支援について抱え込む可能性もあると考えられる。

事例 I

<家族と距離をとることで家族と良好な関係を保とうとしている事例>

○ 依頼

依頼は障がい者支援団体を通じて行った調査協力者へは郵送にて調査用紙を配布した。

○ 家族構成

父 (60代)・母 (60代)・長子 (女, 30代)・次子 (調査協力者, 女, 30代, 以下 I と表記する)・末子 (障がい者, 男, 20代)

現在が父・母・末子が同居しており, 長子と I はそれぞれ家庭を持ち, 原家族とは離れて住んでいる。

○ FIT 分析

(A) 夫婦シール

- ・位置: ナナメ (父ななめ右下)
- ・向き: 交わり。両親は末子を見ている。
- ・結びつき: 普通
- ・パワー: 父 5, 母 3

(B) 子シール

	長子	I	末子
・夫婦軸への向き: ナナメ		直角	直角
・パワー:	2	1	4
・夫婦軸との関係:	上	下	上

(C) 全体

- ・夫婦間距離 / 親子間距離

父-母: 3.5 母-長子: 5.7 長子-I: 8
父-長子: 4 母-I: 3.5 長子-末子: 3.1
父-I: 4.5 母-末子: 3 I-末子: 6
父-末子: 3.2

- ・占有率: 9%
- ・世代間境界
引けない

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

長子 I 軸: 垂直

長子末子軸：ななめ（ほぼ平行）

I 末子軸：垂直

FIT に関する自由記述

1, シールを貼った順番

弟, 父, 母, 長子, I

2, FIT を作成したときにきょうだいについて感じたことや, 思い浮かんだイメージ

弟中心, 父の影響力が大きい。姉の弟への依存度が高い

3, 家族についての満足度 80 点（離れているので高くなっていると思います）

4, より満足できる家族になるために, どこを変化させるか

現時点は満足していますが, 何かあった時にどうなるのか不安はあります。例えば母が病気になる等

○ 位置解釈

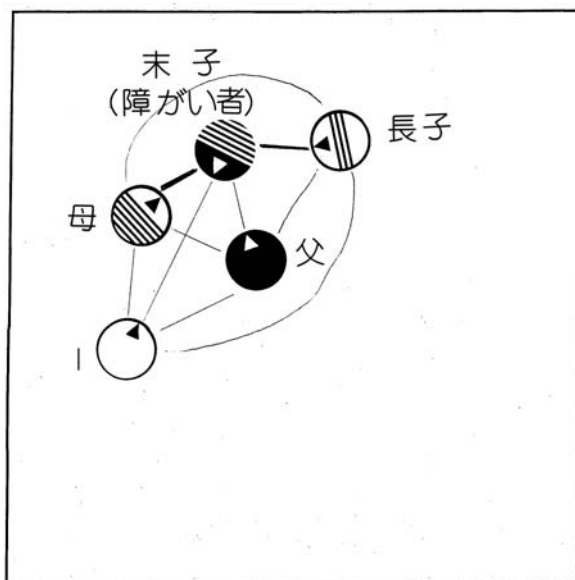


図8: Iの作成したFIT

全体的に家族成員間の距離が短く, また, 占有率が9%であることから, 比較的凝縮された家族像であると考えられる。

Iの位置は, 家族像の中では一番下に位置し, パワーも一番弱い。Iは, FIT作成後の感想で「自分は他メンバーと距離を保っていると感じている」と記述しており, 家族との距離感を実感している様子がうかがえる。また, Iの家族内でのパワーは一番弱い。これは, 実際に離れて暮らしていることが影響していると考えられる。また, Iは「弟(障がい者)を中心にひとつにまとまっていると思うが, 自分は家族と距離を保っている」と感じていることから, 家族から一歩引いたところに自分を位置付けていることが, 家族への影響力をほかのメンバーより弱めているとも考えられる。

IのFITでは, 父のパワーが一番強い。Iは, FIT作成後の自由記述式質問紙調査にも「父の影響力が大きい」と記述していることから, Iは意識レベルにおいても父の影響力の強さを実感していることがうかがわれる。また, 父と母は障がい者である末子の方を向き, 末子は両親を見ているとIは特記している。

Iは, 弟を父の次にパワーが強いと表現した。FIT作成後の感想では「弟を中心にひとつにまとまっていると思う」と, また, FIT作成中にきょうだいについて感じたことや思い浮

かんだイメージについても「弟（末子）中心」とIは記述している。このことから、家族成員が障がい者である末子を中心に動いていると、Iが認知していることが、家族内での末子のパワーを強めたと考えられる。

また、I以外の家族成員は、全員が末子とつながりが強いと表現された。Iは、長子について「姉の弟への依存度が高い」と、FIT作成中にきょうだいについて感じたことや思い浮かんだイメージに記述している。十島（2006）は、持続的な見守りと支援が必要な知的障がい児は、家族生活の中心にあって、すべての家族成員の行動をコントロールし、支配する傾向が強いと述べているが、これは知的障がい児に限ったことではないであろう。このFITにおいても、十島（2006）が指摘するようなことが起きているとも推測される。

このFITでは、I以外の家族成員が、ほぼ等しい距離で末子を囲むように位置し、全員が末子の方を向いているところも特徴的であろう。末子を中心として父、母、長子が積極的に関わっているのではないかと推測される。Iはそのような家族に距離を置いてはいるものの、末子と母の方を向いていることから、影響力として家族には反映されないが、家族に関心をむけている様子うかがわれる。

Iは、家族の満足度を80点と高く回答した。Iは家族に対する満足度を「離れているので高くなっています」と特記している。大学生の住居形態と家族関係について調査した徳田・柴田（2006）によると、家族と同居している学生よりも、別居学生の方が家族との心理的な距離が近いことが明らかになっている。Iは学生ではないが、家族と離れたことによって、近くにいたときにはあまり感じるができなかった親への感謝の気持ちや大切に思う気持ち（徳田・柴田）、また、同胞のこれからを思う気持ちなどが、心理的距離を近づけ、家族に対する満足度を高めたと考えられる。

○ 役割解釈

第1因子「きょうだい（同胞）からの影響」構成項目群のIの得点平均は2.6であった。項目別では「進路選択や職業選択の際には、きょうだい（同胞）のことも考える」にIは「あてはまらない」と回答しており、それ以外の項目で当てはまると回答している。このことから、Iは、進路、職業選択以外での同胞の影響を意識しており、これまでの同胞を「尊敬すべき大切な存在」としてとらえ、また、将来にわたっても「お互いに高めあう存在」として同胞をとらえていることがうかがわれた。

第2因子「社会福祉への関心」構成項目群のIの得点平均は、2.3であった。項目別では、「社会福祉に関わる仕事に就きたい」にIは「あてはまらない」と回答し、それ以外の項目に「あてはまる」と回答している。Iは会社員であることから、仕事として社会福祉領域を選択するに至るほどの関心ではないにしても、ボランティアや社会向上に対して関心を寄せるIの様子がうかがわれた。

第3因子「家族とそれを取り巻く環境との関わり」構成項目群のIの得点平均は2.8で、HS群傾向が見られた。項目別では「もし家の仕事を継がなければならない場合

、自分が継ぎたいと思う」に I は「まったくあてはまらない」と回答している。これは、現在 I が仕事に就いて、経済的に自立していることから、家業継承について関心が低いことを示していると考えられる。また、一方で「自分は他メンバーと距離を保っていると感じている」と I が実感していることから、家と距離を保ちたい事から、この項目の得点を低く回答したとも考えられる。さらに、I は「自分の家族は地域に受け入れられていると思う」「きょうだい（同胞）のことについて誰にでも話せる」に「あてはまらない」と回答していることから、I は、家族を取り巻く環境やそのかわりについて、肯定的に捉えられていないのではないかと推測される。また、「できれば困った時にきょうだい（同胞）に対する経済的援助をしたい」「障がい者に優しい人と結婚したい」に「あてはまる」と回答している。このことから、将来にかけて同胞との関わりを続けていきたいと考えている I の様子がうかがわれた。

第 4 因子「就職・進路決定の際のきょうだい（同胞）に対する意識」構成項目群の I の得点平均は 3.3 で、HS 群傾向が見られた。項目別では「職業に就く際、きょうだい（同胞）の職種などが気になる」に I は「まったくあてはまらない」と回答し、それ以外については「あてはまらない」と回答している。このことから、I は、就職・進路決定の際に同胞を意識していない様子がうかがわれた。

第 5 因子「家族とのつながり」構成項目群の I の得点平均は 3 であった。項目別では「地元で就職したい」に「まったくあてはまらない」「結婚しても、親やきょうだい（同胞）の近くに住みたい」に「あてはまらない」と回答しており、家族との物理的距離を保とうとする I の様子がうかがわれた。一方で I は「家族の絆は強い方だ」に「あてはまる」と回答しており、物理的な距離は保ちたいものの、心理的距離は離れていないことを実感している様子がうかがわれた。

○ 考察

FIT・質問紙からは、I が実感しているように家族と距離を保っている様子がうかがわれた。しかし、I の家族に対する満足度は 80 点と高い。この満足度に対して、I は「離れているので高くなっていると思います」と特記している。このことから、I にとって距離を保つことは、家族成員との良好な関係を保つ上では重要なことであると推測される。質問紙では、家族との物理的なある程度離れた距離を保ちたいが、心理的距離を遠いとは実感していない I の様子がうかがわれたことから推測される。西村・原（1996）は、障がい者を同胞にもつきょうだいの役割取得は自然の成り行きであり、ありのままを受け入れ家族が一体となって行動することが家族機能を再生させるといえる、と述べている。本事例において、I は同胞に対する支援を意識しているという点で、家族の中での役割を確立している様子がうかがわれた。家族と物理的に距離を保っていたとしても、同胞と同居している家族と同様の支援意識を持っていることが、I が心理的距離を離れていないと感じることに関連すると考えられる。

質問紙調査では、I はすべての因子で HS 群傾向を示した。NHS 群と有意差のあった第 4 因子に関しては、その傾向が顕著であった。つまり、I は、就職・進路決定の際に、同胞をほとんど意識していないと回答していることになる。この結果は、I が自立した一人の人間として、周囲の環境に影響されないことを表しているとも考えられる。また、同胞からの影響が大きすぎるために、その影響を受けまいと意識している姿であるとも推測される。

また、I は、これまでの同胞との関わりを受け入れ、将来的にも継続して関わっていかうとする様子が、FIT・質問紙からうかがわれた。将来的なかかわりに関して、I は、同胞に対する経済的な援助意欲があり、さらに、自分の結婚相手に障がいに対する理解を求めている様子から、将来的に同胞を支えていく役目を意識していると推測される。FIT 作成後の自由記述では、将来に対して「なにかあった時にどうなるのか不安はあります。たとえば母が病気になる等」と、不安も意識している。しかしながら、同胞を含めたきょうだいと一緒にお互いを高めあいながら生きていくことに対して、肯定的に捉えていることから、意識している役割を背負いこみ、負担を感じている様子はいかがわれなかった。

4. 総合考察

本章では、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観について、きょうだい家族の中で、どのような位置・役割から捉えているのかを検討した。

本章で検討を行った 8 つの事例では、家族に対する満足度を 2~30 点と低く評価する調査協力者と、70~90 点と高く評価する調査協力者の二層に分かれた。家族に対する満足度を低く評価した調査協力者の FIT には、以下の 3 つの特徴が共通してうかがえた。

(1) 同胞のパワーイメージがきょうだいのパワーイメージよりも弱い

このことは、きょうだい同胞よりも家族に対して影響力や発言力があると感じていることを示すと考えられる。時として、影響力や発言力が強い者は、その本人の意図とは無関係に弱い者を保護する立場になることが多い。その意味で、きょうだいは援助者になり、同胞を守るべき者として捉えていることも推測される。兄弟姉妹の関係は、親子関係のようなタテの人間関係と、友達関係のようなヨコの人間関係の間にある、ナナメの人間関係（依田、1978）と言える。一方で、人が誰かを援助するという行動には、極めてタテの関係に近い人間関係で行われる類の行動もあるだろう。家族に対する満足度を低く評価した D と G も、他の事例と同様に、経済的援助に対して意欲を示している様子がいかがわれた。D と G は、タテの人間関係に近い関係性で同胞を捉えており、支援者—被支援者という位置関係で、同胞との二者関係が意識されているものと推察される。また、D と G は、これまでの同胞とのかかわりを肯定的に捉えていない様子、また、今後のかかわりについて模索している様子が質問紙からうかがわれた。きょうだい同胞とのかかわりを肯定的に捉えていない状態であるにもかかわらず、同胞に対して何らかの援助を意識しているという両価的な自己の思いを、同胞を守るべき存在であり、きょうだいは同胞を守る役割を担う

という文脈で捉えることによって折り合いをつけていると推察される。

(2) きょうだい家族成員の誰とも強いつながりをもっていない

FIT で表現されるつながりの強さは、FACESⅢの凝集性と正の相関を示したことから、家族成員が互いに感じる情緒的な結びつきの強さ（亀口，2006）を表すと考えられる。また、^印の向きは、関心を示す方向を表している。きょうだい家族に対して結びつきが強いと感じている状態は、相互に情緒的な交流があると感じている状態であり、家族内で親密であると感じている状態を表すと考えられる。満足度の高い事例の FIT では、きょうだいは家族成員の誰かと情緒的なつながりがあると表現しており、感想や自由記述式質問紙の中で、家族全体について触れられているものが事例 C を除いて見受けられる。たとえば E は「家族全員、同じくらい、一人いないだけで雰囲気が変わるという影響力を持っている」、「1人ひとり、自分の都合で行動してしまったりわがままを言ったりすることが、時たまにあって、それを改善できたら、そのわがままを抑えて、相手に譲る優しさが生まれ、また同時に相手に感謝する気持ちが生まれて、さらに家族の絆が深まると思う」、F は「家族みんなが仲良く、円満な家庭だと思う」、H は「今のところ大きな不満はない」、I は「現時点は満足していますが、何かあった時にどうなるか不安はあります」、「離れているので（満足度は）高くなっていると思います」とそれぞれ述べており、程度の差はあれ、家族に対して親密さを感じ、肯定的に家族を捉えている様子がうかがわれる。家族と情緒的なつながりを持ち、親密さを感じることは、その相手を純粋に思いやる心から援助・支援をしたいという感情が起こるが、そうでない場合には、周りから期待された役割を担う意味や価値を見いだせないままに、支援をする役割を担わざるを得ない位置に置かれていると推測される。このような場合には、きょうだいは不安定な状況で同胞との将来について考えることになり、負担が大きくなると推察される。

(3) きょうだい関心を向ける人物がきょうだいに対して関心を向けていない

家族成員との間に強い情緒的なつながりを感じていないきょうだいの事例が、満足度の低い場合に見受けられた。そのように表現したきょうだいは、同胞ときょうだい向き合う形で FIT を作成しているのも特徴である。障がい者を同胞にもつきょうだいの家族では、同胞と母が向き合い、かつ結びつきを強く表現する FIT が多くみられる。これは、日常生活において、母は同胞への介助や見守りという役割を全面的に担うことが多いと予想されるため、障がい者のいる家族において、このように同胞と母が表現されるのは必然であるとも考えられる。一般に、家族成員の関心が同胞に向かいやすい状況の中で、家族成員から関心を向けられているということは、きょうだい家族の中でのかけがえのない自分というものを確認することにつながる可能性も考えられる。一方で、同胞ときょうだいを向きあう形で表現した H と I は、原家族から独立し、それぞれに家庭を持っている。このことから、同胞と H・I が向き合う形で FIT を作成したことは、親の高齢化に伴って同胞との

将来を考えなおす転換期であることを示しているとも考えられよう。

本調査では、障害者を同胞にもつきょうだい 8 事例について、探索的な検討を行った。その結果、家族に対する満足度の低いきょうだいと、高いきょうだいの家族観の特徴について、いくつかの示唆を得た。家族に対する満足度が低いきょうだいは、これまでの同胞とのかかわりについて、肯定的に捉えていない様子が質問紙からもうかがわれた。また、これからの同胞とのかかわりについても距離を保ちたい様子がうかがわれたことから、家族に対する満足度の低いきょうだいは、過去から未来への連続性の中で、同胞を肯定的に捉えていないことが示唆された。一方で、家族に対する満足度の高いきょうだいは、これまでの同胞とのかかわりについて肯定的に捉えている様子がうかがわれたが、これからの同胞とのかかわりについては、距離を保ちたいという様子がうかがわれた事例も見受けられた。

すでに原家族から物理的離れており、独立して生計を立てている H・I の事例では、家族に対する満足度が高く評価された。また、H・I 以外の事例の FIT では、きょうだいは両親の方を向いているが、H・I の FIT では、きょうだいは同胞の方を向いている。H・I 以外のきょうだいは、発達段階では青年期に位置する。青年期のきょうだいは、両親の扶養のもとで、自分自身の問題に直面することになる。この時期は、親の意見を参考にしたり、悩みを打ち明けて相談し、親の指示に従おうとする心理的な関係である規範的影響力（松井，1999）が及んでいると考えられる。規範的影響力は、成長するにつれて徐々に低下し、前成人期へと移行する。この時期のきょうだいは、このような規範的影響力を受ける中で、例えば自身の進路や就職をめぐる悩んだり、時には両親と衝突したりすると考えられる。H・I を除く青年期のきょうだいが、親の方を向いて FIT を作成することは、同胞との関わりや、同胞との今後の関係について具体的に思いめぐらすことも然ることながら、自身の問題に強く関心が向いていることを示していると推察される。前青年期に移行すると、自身の問題だけではなく、親の高齢化に伴い、改めて原家族と対峙するようになると考えられよう。

これらのことから、家族に対する満足度の高低にかかわらず、きょうだいは同胞との将来について、それぞれの発達段階の中で、以前とは違ったかかわりを意識していると考えられる。このことは、きょうだいと同胞・家族との関係は固定的なものではなく、発達に伴い変化していくことを示唆しており、それぞれの発達段階において、他の家族成員ときょうだいのかかわりや、それに対するきょうだいの意味付けにより、きょうだいの家族観は変化すると考えられる。

第 4 章 障がい者を同胞にもつきょうだいに対する半構造化面接調査

1. 目的

従来の障がい者を同胞にもつきょうだいの研究の限界点や問題点について、橘・島田（1999）は、「1. 障がい者のライフステージ全般を見通したきょうだい研究が少ないこと」「2. 文化社会の枠組みにおける家族観が考慮されていないこと」「3. 地域福祉という視点で障がい者のきょうだいと考えられていないこと」「4. 一般性を重んじた客観的な傾向は得られたが、個々の事例にとっての確からしきやリアリティーが失われ、数的処理ではつかみきれない部分が見逃されうること」「5. 障がい者のきょうだいについての多くの研究が、障がい者の存在によるきょうだいの心理的不適応とそれに対する援助の必要性を述べた研究であること」の 5 つを挙げている。特に 4 点目の指摘は、臨床心理学の分野が中心となり担うテーマであると考えられる。また、原・西村（1996）は、これまでの実証的研究を概観し、一般的傾向を検出しえたそれらの研究でも、かなり個人差のあることが指摘されていること、また、「個々人が背負う負荷は主観的な重さの相違をもつ性質ものであり、（略）実生活できょうだい達が背負う重みはそれぞれ異なっていると考えるほうが妥当である」と述べている。このように、障がい者を同胞にもつきょうだいに対して、個人の姿を 1 人ひとり具体的に捉える「個別性」という視点と、人と人との関わりや個人と環境との相互作用という「関係性」（前川,2004）を重視した接近を試みることで、一般的傾向の記述から見逃されがちであった、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観への個別性を検討できると考えた。

前章で述べたように、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観は、きょうだいが家族成員の関係性やパワーをどのように捉えているか、また、きょうだい期待される役割やその遂行にあたっての家族成員間の相互作用、さらには、それらをめぐる両価的な感情など、様々な要因が絡み合っているとことが示唆された。本調査では、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観について、前章までに示唆された一般的傾向や、個別事例の検討から得られた仮説も考慮しつつ、実際にその一般的傾向や仮説はきょうだいにとってどのような意味を含むことなのかを、個々の事例にとっての確からしきやリアリティー（橘・島田, 1999）を通して検討することを目的とする。

本調査では、きょうだいの家族観について、広い人間関係や生活状況などの様々なコンテキスト（文脈）（前川,2004）から検討することで、よりきょうだいの個別的な理解につながると考え、調査方法に半構造化面接を選択した。

2. 方法

障害者を同胞にもつきょうだい1名に対して、半構造化面接を行った。

① 調査協力者

調査協力者は障がい者を同胞にもつきょうだい1名（以下 B と表記する）である。B は 20 代前半、男性で、福祉系学科に在籍する大学生である。家族構成は父（50 代）、母（50 代）、B、次子（女性、10 代）の 4 人。現在全員が同居している。

なお、B は、第 3 章で行った質問紙調査の調査協力者である B と同一人物である。

B は、第 2 章で行った調査で同胞を B 自身の成長を促してくれる存在であり、現在の同胞との関わりを肯定的なものと捉えている一方で、将来に関する選択や決定、将来的な同胞との関わりについては影響を受けないと感じており、同胞との将来の関わりについて、これまでと違った関わりを意識する B の様子がうかがわれた。

② 質問項目

	質問項目
①	家族構成
②	きょうだいが同胞と過ごした期間
③	きょうだいが同胞の障がいについて知った時期とその時に思ったことや感じたこと
④	これまでの同胞との関わりについて、印象的なエピソード
⑤	その時同胞・家族について思ったことや感じたこと
⑥	これまでの同胞・家族について思うことや感じること
⑦	これから同胞とどのように関わっていきたいか
⑧	これから家族とどのように関わっていきたいか
⑨	⑦・⑧について、実際どうなりそうか
⑩	家族のつながりは強いのか
⑪	家族のつながりが強ければいいと思うか、また、それはなぜか

質問項目は、11 項目で、第 2 章及び第 3 章で得られた知見をもとに、研究者が作成した。

まず、B の同胞を含む家族と物理的にかかわりを持っていた期間を確認するために「①あなたの家族構成について教えてください。」「②あなたが同胞と過ごした期間を教えてください。」の 2 項目を設定した。

また、B が同胞を障がい者として認識した時期とその時の感情について確認することで、後の項目と併せて、同胞に対する B の感情の変化を追跡できると考え「③あなたが同胞の障がいについて知ったのはいつのことですか。その時の気持ちや感じたことを教えてください。」の 1 項目を設定した。

これまで B が同胞とどのようなかかわりを持ってきたか、さらに、それに付随する感情について想起しやすいように、B にとって同胞とのかかわりについて印象的なエピソードを

想起してもらった。その後、同胞及び家族について、その時感じた感情について話してもらった。設定した質問項目は「④これまでの同胞とのかかわりについて、いいことも、悪いこともたくさんあると思いますが、その中でも印象に残っているエピソードを幾つか教えてください。」「⑤そのことについて、あなた同胞や家族についてどのように感じたか、または思ったか詳しく教えてください。」とした。さらに、これまでの同胞との関わりという視点から、同胞及び家族について B がどのように感じているかを尋ねる質問項目として「⑥これまでの同胞とのかかわりを振り返って、同胞あるいは家族について、どのように思いますか」を設定した。これら 3 項目は、過去から現在という時系列で B が同胞を含む家族についてどのように感じ、どのように捉えてきたかを明らかにする目的で設定した。

次に、時系列では現在から未来について、B が同胞を含む家族について、どのような思いや希望、及び展望を抱いているかを明らかにするために、「⑦あなたは、これから同胞とどのような付き合いをしていきたいと思っていますか。」「⑧あなたは、これから家族とどのような付き合いをしていきたいと思っていますか。」の 2 項目を中心に設定した。これらの項目において、第 2 章の質問紙調査で得られた因子を構成する項目としても使用され、同胞との将来的なかわりを考える、具体的なある一つの基準として、「同胞への金銭的援助についてどのように考えているのか」「進路・就職・結婚の意思決定の際に家族のことをどのように考えているのか」「将来の家族との物理的距離についてどのように考えているのか」についてを、また、障がい者家族の将来的問題として、障がい者福祉分野でよく議論されているテーマであり、研究者が重要と判断した「親亡き後、同胞とどのような付き合いをしていくか」についての 4 項目を、自発的に述べられない場合の付属質問項目として設定した。また、これらの質問項目について、現実的に実行可能かどうかを明らかにすることで、B の同胞との関わりに対する希望や展望と現実の間での、葛藤や折り合いについて捉えられると考え、⑦・⑧と付属質問項目の 3 項目について、「⑨実際にどうなりそうか」を尋ねた。

B の考える家族とのつながりについて捉えることで、B の家族観について理解を深めることができると考え「⑩あなたの家族のつながりは強いですか」「⑪家族のつながりが強くなればいいと思いますか、また、それはなぜですか」の 2 項目を設定した。

以上の 11 項目は、過去から未来へと時系列に沿って設定したが、B の自発的な語りの流れを尊重し、実際の質問場面で質問項目が前後することを許容した。

③ 家族内での位置の変化についての測定

現在から未来にわたって、B が家族をどのように捉え、家族についてどのような展望を抱いているかを、視覚的イメージ表現を用いて明らかにするために、FIT を使用した。B は、第 2 章で FIT を用いた質問紙調査で現在の家族イメージとして FIT を作成しているが、前回の質問紙調査から約半年の期間がたっており、現在の家族イメージが、半年前に B が表現した家族イメージと変わっている可能性があるため、現在の家族イメージと未来の家

族イメージについての 2 つの FIT を作成してもらった。現在の家族イメージについての FIT は、面接を始めるにあたってのきっかけ作り、さらに、FIT をもとにして、現在の家族やこれまでの家族について想起しやすいように、面接調査の最初に作成してもらった。未来の家族イメージについては、現在の家族イメージに対して想起しにくいと考えたこと、面接調査で言述的に時系列で述べられる流れを尊重したことから、面接調査の最後に作成してもらった。

分析の方法は、質問項目に対して B が回答した部分を抽出し、研究者が解釈を行った。個人が特定される恐れのある情報は、大意を損なわない程度に研究者が変更を加えた。

3. 手続き

調査時期は平成 20 年 12 月上旬で、場所は、雑音等が少なく、調査対象者と面接者が 2 人だけで落ち着いて話ができる場所として、H 大学附属教育総合実践センター内の 1 室を使用した。B は、第 3 章で実施した調査の際に、面接調査への参加に承諾をしてくれていたが、改めて 2008 年 11 月下旬にメールで面接調査を依頼し、面接調査協力への承諾を得た。

面接開始にあたっては、以下の 3 事項について B に対して書面を用い説明した。なお、この書面は B と面接者が保管している。

また、面接時間は 105 分であった。

① 調査の目的

B に対してこの面接調査の目的を「これまで、私は障がい者を同胞にもつきょうだいの皆様が、家族をどのように捉えているかを明らかにすることで、家族の中でより豊かな人生を送ることができるのではないかと考え、研究を行ってきました。これまでの調査は、B さんにも以前ご協力いただいたものでした。これまでの研究を踏まえ、今回は B さんがこれまで家族とどのような思いで関わってきたのか、また、これからどのように家族と関わっていききたいのかについて、より詳しくお聞きしたいと思っております。」と説明した。

② この面接調査でうかがう内容とプライバシー尊重、個人情報の取扱い

まず、この面接調査では、家族のことを中心に私的な内容を話していただくことを確認し、B の了承を得た。面接中に面接者から問われた質問については、無理にお話していただく必要はないこと、また、ここで得られた情報は、面接者の修士論文およびそれに関連する研究にのみ使用すること、情報は匿名化され、個人が特定されることのないように配慮することを伝え、B の同意を得た。

③ 記録方法

面接中に話された内容を正確に記録するために IC レコーダーを使用したい意向を伝え、B の了承を得て IC レコーダーを使用した。

これらの説明の最後に、面接調査に対する質疑応答場面で、Bから「例えばどんなことですか」と聞かれ、面接者が「例えば、今までの説明でわからなかったことや、詳しく聞きたいこと、もし、不安なことや、心配なことがあれば、そういったことでも構いません。」と答えると「不安なことというか、心配というか…整理して話すのが苦手なので、うまく話できるかどうか心配です。ご期待に沿えるかどうか…」とBは下を向いて話した。面接者は「この場に来ていただけたことだけでもありがたく思っており、大変感謝しています。整理してから話さなくても、話しているうちに整理できることもあると思うので、思った通りに話してもらえれば、率直なお話が聞けて自分もとてもありがたいです。」と返した。

これらすべての説明の後に再度、調査協力への意思確認を行い、同意を得たため、研究協力承諾書にBから署名をもらった。

4. 結果の整理

結果の整理は、以下のとおり行った。まず、調査協力者が語った内容を、時系列で整理した。その中で、調査協力者がエピソードを交えて語った内容ごとに研究者が分類し、各カテゴリーを命名し、検討を行った。この接近は、他者の感情の動きや、それと相関すると考えられている行動の選択について、行為の当事者が持つ主観的な意味構造を解釈し、了解するというアプローチである(山本, 2007)。さらに、研究者が当事者であるということは、データが当事者性の出会いの中で生み出され、その解釈は、研究者・調査協力者両者の当事者性の重なりの中で生成していく(山本, 2007) ことになりえると考えられる。また、この過程は、「語られたこと」と向き合うために、同時に「語られないこと」の重みを受け止め、その体験の中身を想像していく(管野, 2007) 過程もあると考えられ、調査協力者の内的過程を詳細に検討するための分析態度として、十分意味のあることと考えた。

5. 結果と考察

5-1. 面接調査の結果と考察

① 過去の家族に対するBの家族観

<同胞を恥ずかしいと感じたことによる同胞の障がいについて初めての意識>

Bは、「小学校3年生のときに、今まで・・・こう、妹のことを、全然・・・こう、言えたり、家に・・・遊びに来て、こう、妹がいても遊びに来てもらったりとかあったんですけど、3年生になったとき、突然その・・・ある日から恥ずかしいって思いが出てきて・・・妹がいるってことが・・・あんまりこう、家に呼ぶのが億劫になったりとか・・・うん、そうですね、そういう意味では3年生のときかもしれないです (面接者の方を向く。顔だけ上げて

いる。)。はい、ずっとそれは中学校・・恥ずかしいって本当に思わなくなったのは大学に入ってからなんです。高校のときにちょっとゆるんで、気持ちが、で、大学で、完全になくなったんですけど。(中略) そうですね、きょうだいがいるっていうのもあんまり言いつらい感じで・・・普段あんまりこう友達には会わさらないので、友達に(きょうだい)がいるって言うのも億劫って言うか、恥ずかしいってのがあったんですけど。(中略) あの、友達が来たときは、あの・・今となっては本当に妹に申し訳ないんですけど(面接者の方をしっかりと見る)、あの、必ず入って、こう、玄関のどこあけて、居間があるんです(手振りで家の間取りを表現する)。居間で妹が見えるので、あの、見えないように母に頼んで、寝室のほうに連れて行ってもらったりとかしてました。」と述べ、小学3年時に、友達に妹を見られたくない、妹がいることが恥ずかしいと思いはじめたことから、妹の障がい意識し始めた様子うかがわれた。また、B自身にきょうだいがあると、友人に話すことへの言いつらさ、億劫さを感じながら過ごしてきた様子うかがわれる。この、言いつらさ、億劫さは、妹の障がいについて言述的に説明することの困難さとの関連が推測されよう。また、周囲の理解が得られないことを危惧することから、友人への言いつらさ、億劫さを感じていたとも考えられる。

妹がいることへの恥ずかしさは、Bが年齢を重ねるごとに薄れていったが、今でも妹に申し訳なさを感じている様子うかがわれた。

<同胞からの反応に対する嬉しさ>

Bは、「あの、妹、妹がって言うわけでもないんですけど、その、養護学校にいたときに、どっか、学校のその、行事で・・・その、いろんなどこに出かけたりしてるんですけど、その、妹がそのときに、ポッキーを、兄に買ってきてくれて、それがすごく嬉しかったです。(恥ずかしそうだが、とびきりの笑顔を見せながら述べた。) ええ、先生が買ったんですけどね(噴き出すように笑った)、実際。ポッキー1つだったんですけど。」と述べ、これまで妹に対して「話しかけたりする」という行動で、妹に対してコミュニケーションを図ってきた。しかし、妹は障がいのため「体もこう、あんまり動けないし、妹はこう、話もできないので」とBが述べるように、妹からBに対してBが知覚しやすい反応があまり見られなかったのではないかと推測される。妹が学校の行事で兄にポッキーを買ってきたことは、たとえ先生が買ったものであっても、Bにとっては妹からBに対する反応として、Bには受け止められたと考えられる。

<一定期間同胞と物理的に離れて過ごしたあとの再会で感じた嬉しさ>

「(Bが) 前に3ヵ月半くらい入院したんですけど、そのときにそう、ずっと妹にも会ってなくて、妹は結構あの、あの、そのときは母も大変だったので、入所(施設)のQってところに、あの、ずっといて、そのときにたまたま、あの、そうですね、1ヶ月くらい会ってなかったときに、ちょうど妹が、何だったかな、来たことがあるんですよ、自分が入院し

てた病院に、たまたま。そのときに会って、すごく嬉しかったです。ちょうどその日に（自分も）点滴が取れて、妹と下のところで会ったんですよ（最初ははにかみ笑いを浮かべながら、ゆっくりとかみしめるように話します。）嬉しかったです。」と B は述べ、家族との物理的な遊離状態であったときに、偶然にも家族と再会することができたことを印象的なエピソードとして挙げた。B にとって、家族との一時的かつ物理的な遊離体験は、次に述べる家族成員の存在感の確認につながり、また、その後の家族との再会は、B にとって嬉しい感情を伴うものとして体験され、再び家族を肯定的に捉えるきっかけの一つになりえたと考えられよう。

< 同胞の存在感 >

「普段もそうなんですけど、やっぱり存在感があるんですよね。何だったかな・・・あの・・・たまにショートステイで 1 泊くらいであの、入所するんですけど（だんだんと発話ペースが速くなる。）、そのとき夜とかいないじゃないですか、そのとき、普段会話してても、妹のいる所定のベッドあるんですけど、見ちゃうって言うか、終わった後とか、結構合間で笑ったりあいづち打ったりするんですよ。ふーんとか。偶然なのかわかんないんですけど、なんか、わかる感じなんですよね。そういうのとかあったので、ついこう、話してるときに、妹の名前呼んで、こう、見てしまったり（面接者と B との間に顔を向け、いつも B が妹を見るときに行っている行動を再現してくれた）、やっぱりこう、日ごろの妹の存在ってのは大きくなって感じますね。いないとやっぱり変って言うか、変な感じがします。（中略）いつもやっぱりこう、いるベッドなので、視界にも入るので。見れば、いないとやっぱり寂しいって言うか。寂しいです。そういうときにわかるんですよね。普段は気付かなくても、やっぱり家にいないと、大切な存在だなってすごくわかります。（中略）普段生活してて、妹に学ぶ部分っていうのがたくさんあるので。」と B は述べ、前述の<一定期間同胞と物理的に離れて過ごしたあとの再会で感じた嬉しさ>とは違い、妹が家族集団から物理的に遊離した状態であり、B が家族集団とともに過ごしている場面において「普段は気付かない」けれども妹の存在感を実感している。日ごろの妹の存在は B にとって大きなものであると感じ、妹が物理的に遊離している状態を「変な感じ」と述べ、さらに「いないと寂しい、大切な」存在であることをかみしめている様子が見られる。

また、B は「妹に学ぶ部分がある」として「（B は）採血なかなか入らなくて、こう、つらいって言うか、泣いたりしてる部分もあるんですけど、妹はこう、びっくりする部分もあるんですけど、こう、冷静に。妹もこう、血管細いんで、何回も刺されたりとかすることあるんですけど、こう、冷静に、泣かないでいるところとか」と述べ、B がつらいと思うことに対し、年少である妹が同じ状況においても「冷静に、泣かないでいる」ことをから、忍耐強さを学んでいる様子が見られた。また、B は自身の入院時の体験を振り返り「例えば、ずっとベッドに寝てて、お尻のところに床ずれできたりとか、その、寝ながら排泄するつらさとか、車椅子も経験したんですけど、やっぱり不便だし、そういう点で妹を尊

敬する。普段から・・・あの、何気ない顔でやってる妹に、尊敬する部分もあるし・・・」と、述べた。Bは、自身の入院経験を通し、何年も不自由な生活を余儀なくされている妹に対して敬意を抱いている様子もうかがわれた。さらに、これらのことは、妹の生活を通し、B自身についても考えを深める出来事としてBは捉えている様子うかがわれた。

<つらさを分かち合い、乗り越えてきた関係としてのこれまでの家族>

Bは、「お互いのこう、つらさを分かち合っている関係って言うか、（面接者の方を向く）父も母も、親としても、こう、つらいわけじゃないですか。そこで、うーん、お互い乗り越えてきた・・・その、家族なので、うーん、やっぱりその分、つらい・・・うーん・・・経験をしてきた分、うーん・・・結びつきが強いんじゃないかなって思います。」と述べ、これまでの家族とのかかわりを振り返って「つらさを分かち合っている、お互い乗り越えてきた」関係として捉えている。Bにとって、つらい出来事を乗り越えてきた経験は、B個人の経験としてではなく、家族成員全員の経験として捉えられているところが特徴的であろう。その経験が、Bの家族成員との結びつきの強さを実感することができた経験でもあると、意味づけられていると考えられる。また、妹が障がい者であることに対し、両親の気持ちを押し量るBの様子うかがえた。

② 現在の家族に対するBの家族観

<同胞のことを第一に考えた生活を家族のテーマにした現在の家族イメージ>

「普段暮らしていて・・・誰を一番基準に、基準って言うとあれですけど・・・考えているとか・・・自分であれば・・・その・・・んー、一番頼りにしている人とか、相談できる人であるとかで、決めたんですけど、親からすれば・・・その、一番、何だろ、優先て言うのも変ですけど、基準にして考えてる意味で、そうですね、この人って感じで決めたんですけど。はい。（中略）母もそうだし、みんなそうだと思うんですけど、妹が障がいもって、体もこう、あんまり動けないって言って・・・なんですかね、同居するとか、そういう点においても、妹のことを第一に、一応弱い立場でもあるので、考えているっていうのを・・・ま、あの、実際に言葉でも言っていたので、そういう意味でみんなに対して強いって言う・・・で、影響力もあるって言う風にここでは捉えたんですけど、それがこう、果たしてこう・・・本当にそう、強いといえるのかどうかって言うのが（中略）実際にこう、本当に考えているかっていうと、うーん、どうなのかなって。妹はこう、話もできないので。実際はやっぱり、あんまり・・・形であれば妹が影響力があるって感じなんですけど、実際のとことはやっぱり妹は弱い立場なので、あの、他の人の、家族内なんですけど、に、の、意見とかにこう、左右されちゃうというか、うーん、かなと思って書いたんですけど。」とBは述べ、Bの家族では、妹を弱い立場として捉え、それ故に家族成員が妹のことを第一に考えるという家族の様子うかがわれた。しかし、そういった家族の文化の中において、Bは、自分自身が本当に妹のことを考えているのかと疑問に感じて

いることが述べられた。また、Bは妹の影響力を「形であれば」と、表層的な影響力として捉えている様子もうかがわれた。家族内で「妹のことを第一に、一応弱い立場でもあるので、考えている」と言葉にしているが、実際は家族成員の意見に左右される存在としての妹であるともBは捉えており、両者の不一致感を感じている様子うかがわれた。

また、Bは家族の満足度に関して「んと・・・・・・・・・・80点。そうですね、やっぱり改めてみても、結びつきが弱いて言う関係がないんですよ・・やっぱ、それなりに、そうですね、みんなも関係あるし、そうですね、妹も今、本当に笑ったりとかするんですけど、家族の中心として、あの、いるので、そういう点でも、そうですね、80点は、はい。」と述べた。Bが評価した現在の家族に対する満足度は80点と高得点であった。その理由として、家族成員相互の関係において、結びつきが弱い関係がないとBが捉えていること、妹が家族の中心として存在しているとBが捉えていることと述べている。また、これらの内容が、Bにとって肯定的に述べられてる様子が見られたことから、Bにとって家族成員相互の結びつきが強いこと、障がい者である妹が家族の中心として存在していることは、家族を肯定的に捉えるための一つの要素になっていると考えられよう。

<自分が育った原点として意識する家族の結びつき>

Bは、家族の結びつきを強いと感じるときについて「そうですね、わりとあの、みんな、隠し事なく・・話ができる点ですね。あの、あの、やっぱりこう、悩んでることとかあれば、父もこう、母や自分に話したり、そうですね、母も、話もしたりするし、そうですね、妹も、家族会議でもないですけど、そういうこう、全体でいろいろこう話し合うってことが多いので、特に、たいてい夕食のときなんですけど」と述べ、また、Bは家族の結びつきについて強い方がいいかという質問に対し「そうですね、やっぱり・・・・・・・・・・今こう、家族って言うのはこう、そんなにつながりない傾向にあるじゃないですか、現在、現在は、一般的には。やっぱり最終的にはその・・ま、結婚して、子供生まれたりしてくるとまた、変わってきたりはしますけど、それでも、自分が育った原点だと思うので、そういう意味で、やっぱりこう、家族で・・・・・・・・結びつきって言うか、関係が深いって言うか・・・・・・・・今後のその・・将来生活していく上においても重要じゃないかなと感じます。」と述べた。Bは、家族の結びつきを強いと感じる場面として、家族成員相互で隠し事なく話ができる点を挙げた。その場面は、夕食時という日常的な場面での会話を想起している様子うかがわれる。また、特に悩み事に関しては、世代間の境界を超えて話し合える関係であるとBは捉えている様子うかがわれた。また、家族の結びつきの強さは、Bにとって家族成員相互の関係が深いことと同意の内容として捉えられている様子うかがわれた。

③ これからの家族に対するBの家族観

<限定的な条件での同胞や家族への支援の展望>

「なかなか地元の方で仕事するのも難しいので、あの、一緒にそれこそ・・生活して・・」

同居をしてって言うのは・・・無理だと思っんですけど・・・うーん・・・そうですね、あの、自分もそういう、あの障がいのほうに、障がい者の分野の施設に勤めたいと考えているので、そういう面で、ま、妹とは違うかもしれないんですけど、障がいの分野が、自分でも・・・うん、そうですね・・・そういう面で、あの、いろいろな面で家族をサポートしていきたいなどは考えています。」とBは述べ、自身が希望する職種を地元で探すのが困難であることから、今までと同様の物理的距離で妹を支えていくことは、困難であると考えている様子うかがわれた。一方で、自身の専門分野と関連して、家族をサポートしていきたいという展望を抱いている様子もうかがわれた。このことは、これからの同胞とのかかわりを、B自身の専門分野に特化した役割での関わりを望んでいるとも考えられる。

また、Bは、別の市に住む、病気で倒れた祖母と高齢の祖父のことについて「うーん、自宅で過ごせるかどうかって言ったら微妙なところはあるんですけど、うちのところで過ごせるのであれば、祖父母も一緒に暮らしていきたいと考えています。」と述べ、「自宅で過ごせるかどうかって言ったら微妙なところはあるんですけど、うちのところで過ごせるのであれば、」という限定的な条件で、祖父母へのサポートも考慮している様子うかがわれた。

さらに、Bが考えるサポートとして「もしその、障がいの施設で勤めることができれば、そういう・・・あの、妹の・・・デイケアの施設と連携して話をつなぐだとか、あとはま、直接的ではないかもしれないんですけど、ま、その、親と一緒に暮らしていくと思うので、親のその・・・困ったこととかがあれば、相談にのって・・・いきたいなと思ってます。<金銭的な援助については？>今いろいろ求人情報などを見て、あの、まー、そうですね、今すぐ金銭の援助をできるって言う状態ではないと思うんですけど、そうですね、将来的に、自分も安定してきて、きたら、それも考えたいと思っています・・・はい。(中略)ま、自分の希望としては、初めは、現場で経験をつんで、それからあの・・・そうですね、(ゆっくりと言葉を選ぶように)あの・・・こっこのほうに戻ってきて、あの・・・一緒に住めて・・・経営でもないんですけど、将来の考えるっていうか、祖父の田んぼもあるので、そうですねこう、うーん、経営していければなと思っていますんですけど。施設かなんか。小さいところでもいいんですけど。(中略)そうになったらまた、妹とも一緒に暮らせれば、いいなと思ってます。」

Bは、自身ができる援助として、同居するなど、物理的に接近して行う直接的な援助よりも、両親の相談にのるなどの間接的な援助をより現実的なこととして想定している様子うかがわれた。これは前述した、Bの専門分野に特化した役割で家族と関わりたいと望むBの姿であるとも推測される。

金銭的援助については、Bが自発的に述べることはなく、将来的に安定していければ、と限定的に捉えている様子うかがわれた。また、Bは「自分のその、状況にもよると思うんですけど、可能な限り、自分としては、金銭的な援助って言うまでは行かないかもしれないんですけど、でも、定期的に例えば、あの、就職して離れて住むことになっても、あの、

会いにいければなっているの考えてます。」とも述べており、同胞に対する金銭的な援助は、Bにとっては中核的な援助として位置付けられていないことがうかがわれた。さらに、Bは、離れて暮らしても、時々同胞に会いに行くという対面交流を通して、同胞と関わり続けることが援助であると捉えている様子がうかがわれた。

また、Bは自身が将来希望する仕事と関連して、同胞に対する直接的なサポートを望んでいる様子もうかがわれた。

<B自身の結婚に際して、自分の家族の印象に対する気がかり>

Bは「そうですね、やっぱり、家族というか、妹のことは考えますね。まあ、まだ、一緒に同居することになるかとか別居で別々に暮らすかとか以前の問題で、障がいを持つてる妹がいるので、ま、そういう面で、うーん、それが、どういう風にその、その例えば結婚相手に影響するのかなとか、相手だけでなく、両親相手の両親だとか、に影響があるのかなって言うのが、考えますね。うーん、やっぱりあの、こう、いい影響、印象ではないと思うんですけど、ちょっと、うまくちょっと言葉にできません・・・」と述べ、自身の結婚に際して、同胞が相手の家族にいい印象を与えないのではないかと心配する様子がうかがわれた。Bは、言葉を選ぶように、目をきょろきょろさせながら話しており、その姿からは、同胞をサポートしていきたいという意欲と、その一方で自分の結婚というライフイベントに、同胞がいい影響を与えないのではないかという不安との葛藤状態にあるように推測された。

<親亡き後での同胞とのかかわりに対する不安>

「そうですね、あのほんとに、こういうことはあの、考えなきゃ本当はいけないんですけど、本当に考えるっていうのを避けてきたので・・・やっぱりその・・・自分で見ていくってのも大変ですし・・・そうなるとうやっぱり、うーん、自分・・・うーん、入所になるのかなと思うんですけど・・・どうしても・・・うーん、厳しい部分はありますよね。自分で見ていくってのは厳しいですし。」とBは述べ、両親が亡くなった後、両親がしてきたような援助を、B自身が行っていくことに困難を感じている様子がうかがわれる。このことは、前掲の項目で述べられた「将来的には同胞と同居したい」というBの意欲と反する現実的な問題との間での葛藤が生じていると考えられる。

また、Bはこの質問に付随したエピソードとして次のようにも述べた。「母もやっぱりその、自分がなくなった後っていうのをすごく心配していて、親からしても、うーん、そうですね、そういうあの、(言いづらそうに目をきょろきょろさせていた)一番いいのは・・・妹、ま、娘が・・・その亡くなった次の日に、あの、自分も死にたいという話を前にしていて・・・言っていましたね。<それをお聞きになった時どうでしたか。>いやー、なんか(一瞬目をギュッとつぶった)・・・つらかったですね、すごく。自分よりもやっぱり、妹のことを考えているんだなってのが、うん。でもやっぱり妹、っていうのが一日っていうのが、

娘がなくなって本当につらい思いをするわけじゃないですか、そういう思いを、なんていうのかな、したくないから、うん、一日っていうのが、すごく衝撃を受けましたね。」

Bは、母が述べたエピソードを「自分よりも妹のことを考えている」と捉え、それをつらい体験として位置づけている。その体験は、後に母親もつらい体験をしたくないからだろう、という文脈でBにとっては了解可能な体験として語り直された。

このテーマは、B自身が「避けてきた」「すごく衝撃を受けた」と述べているように、Bにとって脅威的なテーマであると推測される。この脅威は、BにとってBが思い描くような援助を、実際には実行が困難であるかもしれないという不安を喚起させることとの関連が考えられよう。

<B以外の三者の結びつきが強くなることで、B自身が安心できる家族のイメージ>

「望むというか、そうですね、これからのことをイメージしたんですけど、やっぱりあの、自分がいなくなって、3人で暮らしていくってなって、やっぱりその、3人の結びつきが強ければいいなと思ったのと (FITの中の3人を指さす)、自分もその、いつまでも親を頼りにしているわけにいかないの、そういう面で、あんまり依存しすぎないように、強く、こう結びつかないようにするってこと。理想でもないですけど、将来を考えれば、やっぱりこれがいいのかなと思いました。(中略) 父と母もこう、今まで以上に結びつきを深めていくってことで、そうですね、あの・・・ま、例えばその・・・たまに帰ったときとか、あの・・・すごく安心できるような家庭になってるのかなって思うんですけど。」とBは述べ、将来の展望として自分が家族から離れることをイメージした。また、Bは安心感を得られる家族を、望む家族としてイメージしている。Bが安心感を得ることができるようになるためには、父と母のつながりの強さをさらに強いものにしていくとBが感じる必要があるとBは認識している様子うかがわれた。また、そのような安心感を得るために、B自身が母とのつながりを弱め「依存しないように」すること、「今までと変わらないかもしれないんですけど、話をする機会って言うのを家族で設けて・・・こう、父も母もこう、思っていることを吐き出すようになる・・・ようにすること、それをこう、設けさせるように、仕向けるってわけでもないですけど、そういう、きっかけを作るって感じですかね。」と、父と母とのつながりを強化するための、連結器的な役割を担うことで、Bが望む家族に近づくことができるとBは述べている。

また、Bは望む家族を90点と現在の家族と並んで高得点で評価した。Bが望む家族を90点と評価した理由について「3人の結びつきの強さが強まったってこともあるし、本来であれば自分が妹にもっと関わっていくべきであるところなんでしょうけど、それができないってことでマイナス10点ってことになるんですけども。」と述べた。今後、一緒に暮らしていくことになるであろう父、母、同胞の3人の結びつきの強さをBは意識している様子うかがわれた。一方で、物理的に家族と離れることで、Bは同胞への関わる機会が少なくなることや、間接的になることへの申し訳なさを感じている様子もうかがわれた。

5-2. Bの現在の家族イメージ分析と考察

(同胞を第一に考えた生活を家族のテーマとし、本当に同胞のことを考えた関わりを模索している事例)

(A) 夫婦シール

- ① 位置：タテ（父上）
- ② 向き：ナナメに近い。両親ともに妹の方を向いている。
- ③ 結びつき：ふつう
- ④ パワー：父 3, 母 4

(B) 子シール

- | | B | 妹 |
|----------------|---|------|
| ① 夫婦軸への向き：ナナメ | | 垂直 |
| ② パワー： | 4 | 5 |
| ③ 夫婦軸との関係：上下なし | | 上下なし |

(C) 全体

- ① 夫婦間距離／親子間距離
父-母：4.5 母-B：8 長子-妹：4.5
父-B：6.8 母-妹：7
父-妹：8.3
- ② 占有率：16%
- ③ 世代間境界
引ける

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

並行

シールを貼った順番

父, 母, 妹, B

○家族イメージ解釈と考察

Bの作成したFITの配置は、親世代と子世代が左右に並列しており、亀口(2003)の指摘する、高校生に一般に見られる親子並列型であると考えられる。

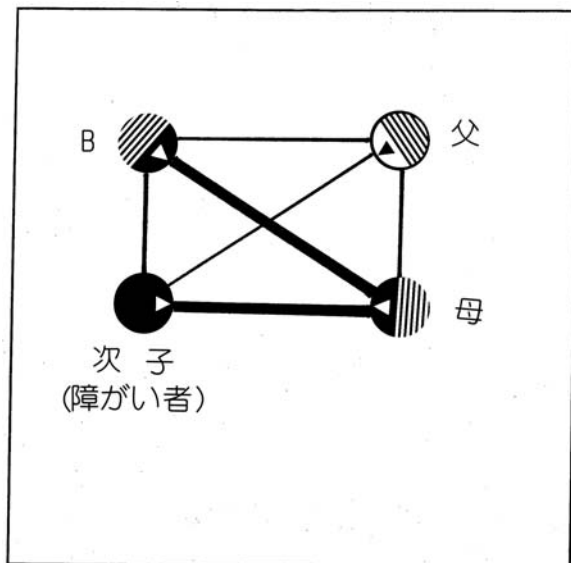


図9：Bが作成した現在のFIT

がうかがわれる。

Bは、自身のパワーイメージを4と表現した。このパワーイメージは、母と同じ強さのパワーイメージであり、Bは、B自身と母が同等程度の影響力を持っていると認識していると考えられる。このことは、先に挙げたように、Bが妹の介助という一つの目的行動を母と共有することを通して、その中で自分の役割を確立していることからくるものと考えられる。また、一方でBは「私は、あの、そうですね、結構母に、いろんなそういう・・・そうですね・・・いろんな悩みとか・・・相談してますね。」とも述べており、母を相談相手として頼りにしており、また、母も妹の介助の面でBを頼りにしている様子が見えられたことから、相互に頼り合う関係として、同等のパワーイメージと表現したとも考えられる。また、Bはこれから社会人としての自立を控えており、そういった親元からの自立というBの環境が、両親と同等かまたは両親よりも強い自己のパワーイメージを想起させたとも考えられる。

このような相互扶助関係の中で、Bと母のつながりは、Bにとって強いものとなっていると推測される。特にBは「私は、あの、そうですね、結構母に、いろんなそういう・・・そうですね・・・いろんな悩みとか・・・相談してますね。あの、自分も過去に病気して、ま、それとは関係するわけでもないですけど・・・うーん、やっぱりそういうのあったので、やっぱり母が・・・そうですね、結構、こう、家族としては結びつきが強いほうだと思うんですけど。」と述べており、母親を頼れる存在として捉えている様子が見えられた。また、母に悩みを相談し、自分の内面を表現できるという点において、Bは母と結びつきが強いと感じていると考えられる。

その一方で父のパワーイメージは、この家族の中では一番弱く表現された。面接の中では、父についてBから自発的に語られることは見受けられなかったことから、障がい者で

Bは、自身のシールを左上に配置し、亀口(2003)で確認された下部におかれた妹や母よりも優位な存在であると認識していると考えられる。このことは、面接の中でBが「妹のことを第一に、一応弱い立場でもあるので」と述べていることや、妹の介助について「最近、でも母もひざとか腰とか痛めてきて、それで、この、ベッドから、食事のときに食事用の車椅子に移動するんですけど、どのときに手伝ったりはするんですけど、やっぱりそういう点でも、やっぱり、だっこしたりとかが大変になってくる年齢でもあるし」と述

べていることから、B自身が家族を援助していく役割を担っていることを意識している様子

ある妹とのかかわりという文脈における父の存在は、Bにとって大きいとは言えないと考えられる。これは、妹との関わりや妹の支援という点については、父の協力が不足であると感じていると考えられる。しかし、Bは父を妹や母よりも高い位置に配置していることから、家族の中での父性的な父親像をイメージしていると考えられる。また、この位置はBと同じ高さの位置であることから、Bは自身を父親と同等に優位な存在として捉えていることが推測される。これは、先にも述べたBの自立との関連も予想される。

この家族の中で、パワーイメージが一番強く表現されたのは、妹である。Bは「普段暮らして……誰を一番基準に、基準って言うのとあれですけど……考えているとか……自分であれば……その……んー、一番頼りにしている人とか、相談できる人であるとかで、決めたんですけど、親からすれば……その、一番、何だろ、優先て言うのも変ですけど、基準にして考えてる意味で、そうですね、この人って感じで決めたんですけど。はい。(中略) 実際その、なんていうんでしょうか……母もそうだし、みんなそうだと思うんですけど、妹が障がいもって、体もこう、あんまり動けないって言って……なんですかね、同居するとか、そういう点においても、妹のことを第一に、一応弱い立場でもあるので、考えているっていうのを……ま、あの、実際に言葉でも言っていたので、そういう意味でみんなに対して強いって……で、影響力もあるって言う風にここでは捉えたんですけど、それがこう、果たしてこう……本当にそう、強いといえるのかどうかって言うのが(ここまではゆっくり話した。時折面接者の方を向くのと、斜め上に視線を送り、考えている様子がかがわれた。)、自分でもそんなにこう、帰って妹に話しかけたりとかする部分もあるんですけど、なんだろ、うまく話せないんですけど、(下を向いて、すぐ顔をあげる。) 実際にか、本当に考えているかっていうと、うーん、どうなのかなって。妹はこう、話もできないので。実際はやっぱり、あんまり……形であれば妹が影響力があるって感じなんですけど、実際のとことはやっぱり妹は弱い立場なので、あの、他の人の、家族内なんですけど、に、の、意見とかにか、こう、左右されちゃうというか、うーん、かなと思って書いたんですけど。」述べ、家族の中で妹のことを第一に考え、基準とした生活をしている様子がかがわれる。しかし、一方では、そのような妹の影響力を表面的であるとBは感じており、本当に妹のことを考えた生活について模索している様子がかがわれた。一方で、Bは、妹のために介助を行っているが、妹の介助全般を行うのは母であり、Bの行動はその母の期待に応えた結果でもありと考えられる。そのため、B自身が妹のためになる行動を考える余地が少ないことから、妹の影響力を表面的であると感じているとも推測される。また、Bが表現した妹のパワーイメージと、実際の妹のパワーイメージとの不一致感は、B自身も言葉では言い表しづらい、複雑な心情がかがわれる。

Bが表現した家族イメージは、母と妹が向かい合い、父も妹の方を向いていることから、両親は妹に関心を向けていることが推測される。しかし、Bは母の方を向いており、Bの関心は母に向いている様子がかがわれる。Bは面接の中で「母もやっぱりその、自分が亡くなった後って……のをすごく心配していて、親からしても、うーん、そうですね、そうい

うあの、(言いづらそうに目をきよろきよろさせていた。)一番いいのは・・・妹、ま、娘が・・・その亡くなった次の日に、あの、自分も死にたいという話を前にして・・・言っていました。(中略)・・・つらかったですね、すごく。自分よりもやっぱり、妹のことを考えているんだってのが、うん。でもやっぱり妹、っていうのが一日って言うのが、娘がなくなって本当につらい思いをするわけじゃないですか、そういう思いを、なんていうのかな、したくないから、うん、一日っていうのが、すごく衝撃を受けましたね。」と述べた。Bは、このエピソードを母が自分よりも妹のことを考えていると捉え、とても衝撃を受けた体験として意味づけている様子がかがわれた。親の死という B の人生の中で大きな出来事であると予想される状況において、このエピソードは B を揺さぶる体験であったと推測される。

5-3. B の望む家族イメージ解釈と考察

(原家族から物理的に離れ、他の家族成員の結びつきが強まることで自身が安心できる家族をイメージした事例)

(A) 夫婦シール

- ⑤ 位置：タテ（父上）
- ⑥ 向き：ナナメに近い。両親ともに妹の方を向いている。
- ⑦ 結びつき：強い
- ⑧ パワー：父 4，母 4

(B) 子シール

	B	妹
④ 夫婦軸への向き：	平行	垂直
⑤ パワー：	2	5
⑥ 夫婦軸との関係：	上下なし	上下なし

(C) 全体

- ④ 夫婦間距離／親子間距離
 父－母：5.5 母－B：8.7 長子－妹：5
 父－B：6.7 母－妹：6.8
 父－妹：8.5
- ⑤ 占有率：16.3%
- ⑥ 世代間境界
 引ける

(D) 夫婦軸ときょうだい軸

並行

シールを貼った順番

父, 母, 妹, B

○ 家族イメージ分析と考察

Bの作成したFITの配置は、親世代と子世代が左右に並列しており、亀口(2003)の指摘する、高校生に一般に見られる親子並列型であると考えられる。

Bは、家族成員のシールを、現在の家族イメージと同じように配置している。このことから、Bは、現在も意識している、妹を第一に考え、家族を援助していく役割を担っていくという展望を持っていると考えられる。

B自身のパワーイメージは、現在の家族イメージで表現されたBのパワーイメージよりも低く表現された。Bは「自分が外に出るから、もう、両親にはあんまり依存しないようにしたいってことですね」と述べ、自分が家族から離れることで自分のパワーイメージを弱くイメージしている様子が見えられた。その一方で、父のパワーイメージは、現在の家族イメージで表現された父のパワーイメージよりも強く表現された。さらに、現在の家族イメージで、Bは父のパワーイメージをB自身より弱くイメージしているが、Bが望む家族イメージでは、父のパワーイメージはBよりも強く表現された。このことから、Bは、妹の介助や、家族の援助という点において、これまでBが担ってきたような役割を父に求めていると考えられる。

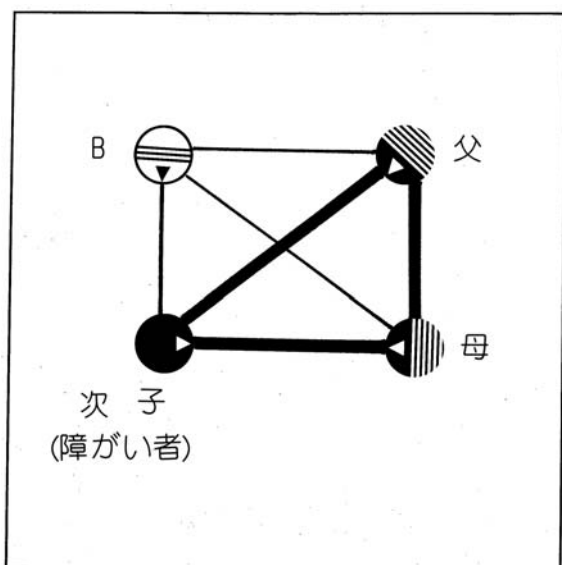


図 10 : B が作成した望む FIT

また、Bは現在の家族イメージの中で、B自身と母とのつながりを強いとイメージしていたが、Bが望む家族イメージでは、母とBのつながりを弱めている。その一方で、Bが望む家族イメージの中で、Bは父と妹、父と母とのつながりの強さを強いものとイメージしている。

面接の中でBは「やっぱりあの、自分がいなくなって、3人で暮らしていくってなって、やっぱりその、3人の結びつきが強ければいいなと思ったのと (FITの中の3人を指さす)、自分もその、いつまでも親を頼りにしているわけにいけないので、そういう面で、あんまり依存しすぎないように、強く、こう結びつかないようにするってこと。理想でもないですけど、将来を考えれば、やっぱりこれがいいのかなと思いました。」と述べている。このことから、Bは現在の家族イメージで表現された母とのつながりの強さを「依存的」と捉えている様子が見えられた。この母との関係は、Bが一方的に依存していると

いう様子がうかがわない。Bは日常生活の中で「ベッドから、食事のときに（妹を）食事用の車椅子に移動するんですけど、どのときに手伝ったりはする」と、妹の介助について述べ、妹の介助という面においては、家族の中で特定の役割を担っていると考えられる。こういったBの姿は、母にとっても頼もしい存在として捉えられていると推測され、母の期待に応えた役割を家族の中で担ってきたと考えられる。このことから、Bの感じている「依存的」な母とのつながりは、相互扶助的な関係であると考えられ、そのような家族システムの変化をBは望んでいるとも捉えられる。

さらにこのような家族になることで「妹のこともそうなんですけど、父と母もお互いにその、やっぱり共に暮らしていくので、その中でぐっところ、結びつきを深めていくってことは、そうだな・・・(FITを眺めた。) うーん・・・父と母もこう、今まで以上に結びつきを深めていくってことで、そうですね、あの・・・ま、例えばその・・・たまに帰ったときとか、あの・・・すごく安心できるような家庭になってるのかなって思うんですけど。」とBは述べ、父、母、妹の三者のつながりが強くなることは、Bにとって安心できる家族であるとイメージしている様子もうかがわれた。Bが望む家族イメージでは、B自身が家族から物理的に離れることを前提としてイメージしている。Bが現在の家族の状態から物理的に離れることは、Bがこれまで家族の中で担ってきた役割を実行する人物として、父にその役割を期待していると考えられる。また、その役割についてBは「自分がいなくても、3人でま、妹・・・3人ですけど、妹はあんまり話すこともできないので、実際こう、会話をするって言えば2人だけじゃないですか。そういう意味で、うーん、やっぱりこう・・・うーん、ま、大変って言うか、うーん、そういう意味でも、寂しいとかってわけじゃないんですけど、やっぱりこう・・・うーん、つらいというか、あんまりこう話できるとかそういうわけじゃないんですけど」と述べ、妹の支援だけではなく、母を支える存在としての役割もBは父に期待している様子がうかがわれる。そのために、今まで強く結び付いてきた母とBのつながりを弱め、父と母がつながりを強めている家族をイメージしていると推測される。

現在の家族イメージでは、Bは母の方を向き、母親に関心を寄せている様子がうかがわれたが、Bが望む家族イメージでは、Bは妹の方を向き、妹に関心を寄せている様子がうかがわれた。現在の家族イメージの中でBは「実際にこう、本当に考えているかっていうと、うーん、どうなのかなって。妹はこう、話もできないので。実際はやっぱり、あんまり・・・形であれば妹が影響力があるって感じなんですけど、実際のとことはやっぱり妹は弱い立場なので、あの、他の人の、家族内なんですけど、に、の、意見とかにこう、左右されちゃうというか、うーん、かなと思って」と述べ、妹の影響力を表面的であると感じている様子がうかがわれた。このことは、Bの関心が母に向いていることと関連が予想される。実際にBは、妹のために介助をしているが、その介助は母の期待に応えた結果でもあると考えられるため、B自身が妹のためになる行動を考える余地が少なかったのではないかと考えられる。Bが望む家族イメージでは、B自身が物理的に家族から離れることを前提にイメージされていることから、Bがこれまで担ってきた、妹への実質的な介助役割を下りることと

なる。このような役割をいったん離れることで、改めて妹に関心を向けることができると B はイメージしていると考えられる。

6. 総合考察

B のこれまでの家族観は<同胞を恥ずかしいと感じたことによる同胞の障がいについて初めての意識><同胞からの反応に対する嬉しさ><一定期間同胞と物理的に離れて過ごしたあとの再会で感じた嬉しさ><同胞の存在感><つらさを分かち合い、乗り越えてきた関係としてのこれまでの家族>の 5 つを中心に語られた。

B は、同胞の存在を「恥ずかしい」存在として強く意識していた一方で、同胞からの反応を喜んだり、同胞と物理的に離れることで、その存在感を改めて実感し「いないと寂しい、大切な」存在や、「学ぶ部分がある」存在としても捉えており、同胞の存在を両面的に捉えている様子うかがわれた。また、B は、自身の入院体験も含め、障がい者家族としての体験を B はつらいと感じ、そのつらさを共有することや、つらい出来事を乗り越えてきたことは、B 個人の体験でしてではなく、家族全体での体験として捉えられている。その体験を経て家族のつながりを実感している B の様子が面接調査からうかがわれた。

B の現在の家族観は<同胞のことを第一に考えた生活を家族のテーマにした現在の家族イメージ><自分が育った原点として意識する家族の結びつき>の 2 つを中心に語られた。特に、この家族の中では同胞を弱い立場であり、家族全体で同胞のことを第一に考えていくことが家族の中で話され、家族成員の共通のテーマであったことは、特徴的であると考えられる。このことは、同胞の支援について両親は B に役割期待を抱いていたと推測される。このような事例は橘・島田（1999）でも報告されていた「父と母と同じ高さでの同胞への接し方」を期待されていた事例と類似すると考えられる。また、FIT では、B 自身のパワーイメージは 4 と表現された。このパワーイメージは、母と同じ強さのパワーイメージであり、B は、B 自身と母が同等程度の影響力を持っていると認識していると考えられる。このことは、B が妹の介助という一つの目的行動を母と共有することを通して、その中で自分の役割を確立していることからくるものと考えられる。このことは、西村（2004）、芝崎ら（2006）が家族の中できょうだいが役割を得ること、自分の位置を確かめうることで、きょうだいに安心をもたらすと述べていることとの関連もうかがわれる。この役割を獲得していることが、B の家族に対する満足度を高めているとも考えられる。

また、B の家族では「妹のことを第一に、一応弱い立場でもあるので、考えている」と言葉にしているが、実際は家族成員の意見に左右される存在として B は捉えており、両者の不一致感を感じている様子うかがわれた。また、このような不一致感は、家族の中で妹のパワーイメージを一番強く表現したが、はたしてそれが本当なのか、という内省からもうかがわれた。そのような不一致感を抱えつつも、B の現在の家族に対する満足度は 80 点と高得点であった。その理由として同胞を中心に家族の結びつきが強いということが FIT に表現され、また B から語られた。このことから、B の感じている不一致感は、B にと

って負担や重荷といったネガティブな感情を伴う感覚として感じられている様子は見受けられなかった。Bは現在自身の就職という人生の転換期を迎えており、この不一致感は同胞との関係、または家族との関係を改めて考える契機を迎えていることを示唆しているとも考えられよう。

また、この満足度については、Bのこれまでの家族観で語られた、障がい者家族としてのつらい体験を家族で共有することや、つらい出来事を乗り越えてきたことをB個人の体験でとてではなく、家族全体での体験として捉えることとの関連も推測される。これらの可能性は、択一的に選択される事象ではなく、相互に関連しあっていると考えられよう。

Bは、家族を<自分が育った原点>として重要であると語っている。このことから、Bにとって家族という器（古川・古賀，2006）はしっかりとしたものとしてBの中では捉えられていると考えられ、基本が強固なものであることからくる安心感や満足感を得ているとも予想される。このことは、家族を肯定的に捉える一つの環境条件が整っているとも考えられ、Bにとってのリソースであると推測される。

Bのこれからの家族に対する家族観は<限定的な条件での同胞や家族への支援の展望><B自身の結婚に際して、自分の家族の印象に対する気がかり><親亡き後での同胞とのかかわりに対する不安><B以外の三者の結びつきが強くなることで、B自身が安心できる家族のイメージ>の4つを中心に語られた。

Bは、自身の希望する職業分野に関連して、同胞や家族への具体的な支援を思い描いている様子がうかがわれた。その内容は、可能であれば、同胞が入所する施設と、Bの職場になるであろう施設との連携を希望したり、ゆくゆくは自分で施設を作り、同胞を支援したいとBが述べていることから、Bの就職や職業上の将来展望に、同胞が深く影響していると推測される。このことは、FITで同胞のパワーイメージが強いと表現されたこととも関連すると考えられる。Bは、実生活における家族との関わりの中で、同胞のパワーイメージの強さに疑問を抱いている様子がうかがわれたが、Bにとっての同胞は、Bが将来的な支援を具体的に思いめぐらすほど影響力のある存在として捉えられていると思われる。

Bは同胞の支援すべてを抱え込むことではなく、自分の専門分野に特化した部分への支援を想定している様子がうかがわれた。また、その専門分野に特化した支援は主に「両親の相談にのる」という間接的なものであり、物理的に離れていてもできることをB自身が考えていると推測される。橘・島田（1999）の事例では、同胞と両親の高齢化に伴い「今の状況では絶対いなくなる」といった自分の生活との間での両面的な感情がうかがわれた事例が報告されている。Bの場合、家族と一定の物理的な距離をとることは、同胞に対する支援を、あれもこれもと抱え込まずにいられる一つの選択肢であるとも考えられる。一方で、その支援は両親健在のもとで、家族の一員として同胞をどう支援するか、といった意味合いが強く、両親が亡くなった後の同胞との関わりはBにとって「同居したいけれども、実際は難しい」といったBの希望と現実的な部分との葛藤を生じさせるテーマであるように思われた。

また、Bは望む家族イメージとしてこれからの家族をイメージしている。Bは、物理的に家族と離れることを想定し、B以外の三者の結びつきを強くすることをイメージしてFITを作成した。亀口（2003）によれば、結びつきの強さは、家族凝集性との相関が認められている。このことから、父と母と同胞の情緒的な結びつきが強いこと、とりわけ現在の家族イメージでは、家族の誰とも強いつながりを持っていないとBが認知している父が情緒的に強い結びつきを家族成員ともつことは、Bに安心感を与えられと考えられる。また、Bが今まで家族の中で担ってきた役割を離れることとの関連も推測される。さらに、Bがこれまで担ってきたと思われる、同胞への介助だけでなく、母のよき理解者としての役割を父に託すことを期待している様子もうかがわれた。

本事例では、Bが現在同居している家族の中で、役割を期待され、その役割に応じることができているという点は、Bにとって内的充実（橘・島田，1999）をもたらすものであったと考えられる。その中でも、母との強いつながりをもつことは、障がい者を子にもつ母にとっても頼もしいことであったと思われる。また、Bにとっても障がい者を同胞にもつきょうだいをして母と情緒的に強い結びつきがあることは、同胞の存在を申し訳ないと思いつつも恥ずかしいという両価的な感情の中で揺れ動いていた児童期や思春期において、Bの心の支えとなっていたと考えられる。このような家族成員間での相互扶助の関係は、Bが同胞をめぐる様々に感情を揺れ動かす状況において、Bの心の均衡を大きく崩すことなく過ごせたことに、ひとつの役目を果たしていると考えられる。

芝崎（2000）によれば、FITにおけるつながりの強さは、Olsonが作成した家族の機能を凝集性（Cohesion）と適応性（Adaptability）の二次元を中心として家族機能を捉えるための尺度であるFACESⅢの凝集性との間に正の相関（ $p<.01$ ）が認められている（亀口，2003）。古川・古賀（2006）は、このFACESⅢを用いて、発達障がい児を持つ家庭の家族機能について考察している。それによると、きょうだいから見た父の態度（ $p<.01$ ）と母の態度（ $p<.01$ ）と凝集性の間に正の相関が認められている。しかしながら、本事例でのBの現在の家族のイメージからは、父と家族成員とのつながりの強さは、他の家族成員同士の間でのつながりの強さに比べれば弱く表現され、Bは父とのつながりを、他の家族成員よりは強いと感じていないことを表現している。このことは、家族全体としての状態がどのようなものであるかというよりも、きょうだいが情緒的なつながりを望む家族成員と実際に情緒的なつながりを持ちえているかが強い影響を与えていると推察される。

第5章 全体的考察

1. 全体的考察

本研究では、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観について、きょうだいが各々の家族の中で、きょうだい自身や同胞を含む家族をどのような位置・役割から捉えているのかを検討した。これまで検討してきた家族観は、客観的な家族観というよりも、きょうだい自身の生活の場としての家族を、きょうだいの目を通して表現した、主観的な家族観である。田部井（2009）が、幼少期のきょうだい支援について、きょうだいが親の愛を感じられることがポイントであると述べているように、きょうだい支援において重要な点は、きょうだいが主体となって家族の中で何を感じているかを知ることであると考える。

第3章で検討を行った8つの事例では、家族に対する満足度を20～30点と低く評価する調査協力者と、70～90点と高く評価する調査協力者の二層に分かれた。家族に対する満足度を低く評価した調査協力者の作成したFITの特徴について、第3章でも詳細に記述したが、ここではそれ以外の章の結果と併せて、改めて検討を行う。

その特徴の1点目として、同胞のパワーイメージがきょうだいのパワーイメージよりも弱い点が指摘でき、このことから、同胞を守るべき存在としてきょうだいが捉えているとも考えられた。

一方で、第4章の面接調査では、同胞のパワーイメージが強いにも関わらず、同胞を「弱い立場である・同胞を基準に考える」と捉えていた。この事例では、「弱い立場である・同胞を基準に考える」ということが家族全体のテーマとして浸透しており、基準としての同胞という点でパワーイメージが強く表現されたと考えられる。また、きょうだいが関心を向ける家族成員、Bの場合は母に対する影響力が強いという点が同胞のパワーイメージを強めたとも考えられる。第3章で家族に対する満足度を低く評価したDとGも、第4章で同胞を「弱い立場である・同胞を中心に考える」と述べたBも、支援者―被支援者という位置関係で、同胞との二者関係が意識されている様子がうかがわれた。しかしながらBは、特に自身の差し迫った進路の決断と関連し、将来にわたって同胞とかかわり合い、支援していくという将来展望がある点において、D・Gと異なっている。このことから、D・Gは、現段階において、同胞との将来的な位置や、きょうだいの役割を模索している可能性が推察された。

2点目は、きょうだいが家族成員の誰とも強いつながりをもっていない点、また、3点目はきょうだいが関心を向ける人物がきょうだいに対して関心を向けていないときょうだいが感じている点である。家族に対する満足度の高いきょうだいは、家族に対して親密さを感じ、肯定的に家族を捉えている様子がうかがわれた。家族成員との間に情緒的なつながりをもつことは、その相手を純粋に思いやる心から援助・支援をしたいという感情が起こるが、そうでない場合には、周りから期待された役割を担う意味や価値を見いだせないま

まに、支援をする役割を担わざるを得ない位置に置かれていると推測される。このような場合には、きょうだいは不安定な状況で同胞との将来について考えることになり、負担が大きくなると推察された。

一方で、家族成員との間に強い情緒的なつながりをもっているきょうだいの事例でも、自分の将来と同胞を含む家族との関わりを模索する事例が見られた。これは、第4章でBが語っていたように、きょうだいの原家族からの自立という場面において、同胞を含む家族との関わりを模索することを示唆していると推測される。このような事例は、橘・島田(1999)・田部井(2006)でも報告されており、きょうだいの課題であると推察される。このとき、家族との情緒的なつながりの強さを基盤とした家族という器(古川・古賀, 2006)がしっかりとしているときょうだいを感じることは、きょうだいにとって今後の同胞との関係や家族との関係を安心して悩める場となりえると考えられよう。

また、家族成員との間に強い情緒的なつながりを感じていないきょうだいも第3章の事例では見受けられた。そのように表現したきょうだいは、同胞ときょうだいが向き合う形でFITを作成している。障がい者を同胞にもつきょうだいの家族では、同胞と母が向き合い、かつ結びつきを強く表現するFITが多くみられる。これは、日常生活において、母は同胞への介助や見守りという役割を全面的に担うことが多いと予想されるため、障がい者のいる家族において、同胞と母が表現されるのは必然であるとも考えられる。このように、家族成員の関心が同胞に向かいやすい状況の中で、家族成員から関心を向けられているということは、きょうだいが家族の中でのかけがえのない自分というものを確認することにつながる可能性も考えられる。一方で、第3章の調査で、同胞ときょうだいを向きあう形で表現したHとIは、原家族から独立し、それぞれに家庭を持っている。このことから、同胞とH・Iが向き合う形でFITを作成したことは、他の事例とは異なり、親の高齢化に伴って同胞との将来を考える時期であることを示していることが示唆された。

第4章で作成されたBのFITでは、すべての家族成員と情緒的なつながりが強いわけではなく、特定の家族成員との情緒的なつながりが強いと表現された。面接の中でもBは母とのエピソードを多く語ったことから、Bにとって母とつながりが強いということは、特別な意味をもつことが予想される。また、Gは、母と強い結びつきを感じており、父からは関心を向けられていると感じているものの、家族に対する満足度を低く評価した。このことから、家族の中できょうだいが誰と情緒的なつながりを強くしたいのか、また、誰から関心を向けられることが、きょうだいにとって意味のあることなのかということは、その事例によって異なることが示唆されていると考えられよう。また、Cが望む家族になるために「夫婦間のつながり(お互いの理解)の強化。両親の同居している二人へのつながりを強化、私にとっての安心感、自己肯定感に繋がると思う。」と述べていることや、Bがこれからの家族をイメージして作成したFITをめぐって語られた「父と母の結びつきが強くなることで、たまに帰った時に(Bが)安心できる家になっている」という言葉から、きょうだい自身が結びつきを強くすることや、関心を向けられる以外に、他の家族成員の関係が

良好であるときょうだいが感じることは、きょうだいにとって安心感を与えるということも示唆された。

また、物理的な距離が離れていることで、家族に対する満足度が高いと回答した、I の事例は示唆に富むと考えられよう。第 4 章での面接調査において、B も家族と物理的に距離を置くということを想定して FIT を作成している。橘・島田 (1998) は、「物理的には離れているとしても、心の隅に障がいをもったきょうだい (同胞) が引っ掛かっていることは確かなことである。」と、物理的に距離を置くことを葛藤的な状況と考察している。しかしながら、本研究では、物理的に距離を置くことは、心の隅に同胞のことが引っ掛かっているという葛藤的な状況よりも、同胞を含む家族から離れ、改めてそれと対峙する機会となりえること、また、きょうだい自身が家族の中で担っていた役割を離れて、自分自身のために自立し、新たな家族との関係を模索する機会となりえることが示唆された。物理的に距離が接近していることは、時として家族に拘束される状況となる可能性があると考えられる。その意味で、家族と物理的に離れていることは、限られた方法の中での家族との関わり方を考えることができるとも考えられる。また、家族に拘束されない一人の時間を充実させることができ、家族とともに暮らしていた時と比べて、余裕をもって家族と向き合える可能性も推察される。

以上、本研究で検討した事例から、きょうだいの家族観について得たいくつかの示唆をまとめてきた。きょうだいが家族の状態を満足感を得られる状態として捉えることは、きょうだい自身が家族の中のかげがえのない一員として、自分を家族の中に位置付けていることだとも考えられる。その感覚は、きょうだい一人で得られるものではなく、家族との相互作用において生じると言えよう。障がい者を同胞にもつきょうだいは、福祉の担い手や、同胞支援の担い手として期待のまなざしを向けられることが少なくない。しかし、そこに到達する、あるいはそれを拒否するに至るまでの過程について、家族との関係を無視して論じることは難しいと考える。本研究で得られた家族観は、家族との関係をきょうだいがどのように見、感じているかという立場に立ったものであり、それはきょうだいの成長とともに変化していく性質を持っていると考えられる。きょうだい支援は、きょうだいの立場に立った支援が重要である。そのきょうだいの立場を理解する一つの視点として、きょうだいの家族観は、貴重な示唆を与えてくれると考えられよう。亀口 (2004) は、家族関係の総和が生み出す力を「家族力」と呼んだ。そして、「家族力」再生のためには、家族構成員そのものが独自に見出した「根拠」を見出す必要があり、それは与えられるものではなく、家族構成員が互いの協働作業を通じて獲得する性質のものである (亀口, 2004) と述べている。本研究で得られた家族観は、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族が、その協働作業を通じ、結果として獲得した家族の形であると考えられる。

本研究で得られた示唆は、調査協力者の属性の統制や数量的検討ができなかったことから、障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観の特徴として、一般化することは残念ながら困難である。しかしながら、これらの示唆は、家族がまさにうまくいっている機能であ

り、また、その要素でもあると考えられる。これらは障がい者を同胞にもつきょうだい支援及び家族支援をするためのリソースとなる可能性を多分に含んでいると考えられる。また、本研究の課題として、これらの要素が具体的に示す行動についての多くは、明示することができなかった。Bは、面接調査の中で「母とよく話すので、結びつきは強いと思う」「両親の会話の橋渡しをすることで、両親の結びつきを強めたい」と話していることから、家族成員間での言語的なコミュニケーションが、リソースとしての具体的な行動になりうることも考えられる。しかし、これは1事例のみから得られた示唆であり、言語的コミュニケーションにより家族の結びつきが強まるのは、Bの家族特有の事象である可能性もあろう。この点においても、今後さらなる事例の備蓄が求められよう。

謝辞

修士論文を作成するにあたり、きょうだいの皆様・特別支援学校・障がい者支援団体の皆様には、お忙しい中調査にご協力いただきましたことに、心より御礼申し上げます。また、貴重なご助言・ご指導くださいました、田名場忍先生と柴田健先生に感謝申し上げます。

文献

- 秋丸貴子, 亀口憲治 1988 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究 2, 1.
- 浅井朋子, 杉山登志郎, 小石誠二, 東誠, 並木典子, 海野千畝子 2004 軽度発達障がい児が同胞に及ぼす影響の検討 児童青年精神医学とその近接領域 45 4.
- 井上雅彦, 平山菜穂, 小田憲子 2003 発達障害児のきょうだいの心理的支援プログラムに関する研究(2) 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集 693.
- 大下由美・亀口憲治 1999 中学2年生の家族イメージ—父, 母, 子の3者関係イメージ— 家族心理学研究 13 1 1-12.
- 大淵憲一 1992 きょうだい関係の心理 家族心理学入門 培風館.
- 小沢哲史 2005 「視線」は家族の何を語るのか—家族紹介映像, FACESⅢ, FIT, セルフモニタリング尺を用いた探索的研究— 岐阜聖徳学園大学紀要 38 109-121.
- 岡本直子・山本真由美 2007 障がい児・者きょうだいのメンタルヘルス—思春期から青年期にかけて— 徳島総合科学部人間学科研究 15 81-96.
- 片平眞理 2005 大学生の家族イメージ 志學館大学人間関係学部研究紀要 26 1.
- 金子恵 2007 援助行動 よくわかる社会心理学 ミネルヴァ書房 82.
- 亀口憲治 2003 家族のイメージ 河出書房新書.
- 亀口憲治 2004 家族力の根拠 ナカニシヤ出版.
- 亀口憲治 2006 FIT(家族イメージ法) マニュアル システムパブリカ.
- 桑原昇 2009 「障害」表記やめて—医療・福祉用語 当事者は不快 佐賀新聞2月16日 <http://www.saga-s.co.jp/>
- ケイガン, J. 三宅和夫監訳 1979 子供の人格発達 川島書店.
- 小山隆 1967 現代家族の役割構造 夫婦・親子の期待と現実 培風館.
- 佐藤久夫 2001 障がいの概念と障がい者の実態 新版社会福祉学習双書 2001 3 障がい者福祉論 2-14.
- Siegel, B. & Silverstein, S. 1994 What About Re? Growing Up Developmentally Disabled Sibling NEW YORK, Prentice Hall Press.
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治 2001 家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析 家族心理学研究 15 2 141-148.
- 芝崎紘美・羽山順子・山上敏子 2006 障がい児きょうだいの抑うつと不安について—家事手伝い・障がい児の世話との関連— 久留米大学心理学研究 5 75-80.
- 白鳥めぐみ 2005 障がい児者のきょうだいたちが抱える孤独感から抜け出すために—きょうだいたちの間に存在する安心感とは何か— 情緒障がい教育研究紀要 24 1-9.
- 菅野幸恵 2007 固定化された関係を超えて あなたは当事者ではない<当事者>をめぐ

- る質的心理学研究 18-27 北大路書房.
- 田倉さやか・辻井正次 2007 発達障がい児のきょうだいに対する自己理解・障がい理解プログラムの試み—海洋体験を中心とした合宿を通して— 中京大学現代社会学部紀要 1 1 45-58.
- 橘秀彌・島田有規 1998 障がい者のきょうだいに関する一考察 (1) —障がいを持ったきょうだいの存在を中心に— 和歌山大学教育学部紀要教育科学 48 15-30.
- 橘秀彌・島田有規 1999 障がい者のきょうだいに関する一考察 (2) —新しい教育・福祉資源としての観点から— 和歌山教育大学教育学部紀要教育科学 48 15-30.
- 田部井恒雄 2006 障がいのある子どもときょうだい・家族について考える 重症心身障がい児 (者) を守る会シンポジウム資料 152-158.
- 田部井恒夫 2009 第34回平成家族考 障がいのある人の“きょうだい”への支援①きょうだいとは何か—その概要から幼少期まで 月刊福祉 92, 2 全社協.
- 徳田仁子・柴田美文 2006 家族関係の再構築における住居形態の意義について—家族イメージ法と肯定的家族観尺度を用いて— 札幌学院大学人文学会紀要 78.
- 谷川友子・柴田健 2007 出生順にの違いが大学生におけるきょうだい認識に及ぼす影響—動的家族描画法を用いて— 東北心理学研究 57 2
- 十島真理・十島雍蔵 2006 知的障がい児とそのきょうだいに対する家族システム療法的考察 志學館大学人間関係学部研究紀要 27 1 17-30.
- 戸田竜也 2005 障がい児のきょうだいを持つ家族を支える 季刊保育問題研究 216 41-49.
- 中坪太一郎・新谷有希・坂口健太・塩見亜沙香・亀口憲治 2006 家族イメージ法(FIT)を用いた質的研究の開発 東京大学大学院教育学研究科紀要 46.
- 中村剛 2007 障害児・者のきょうだいが同胞にいただく心理的特性に関する研究 山口大学心理臨床研究 7 11-21.
- 西村辨作 2004 発達障がい児・者のきょうだいの心理社会的な問題 児童精神医学とその近接領域 45 4.
- 西村辨作・原幸一 1996 障がい児のきょうだい達 (1) 発達障がい者研究 第18巻第1号 56-67.
- 西村辨作・原幸一 1996 障がい児のきょうだい達 (2) 発達障がい者研究 第18巻第2号 150-157.
- 原幸一・西村辨作 1998 障がい児を同胞にもつきょうだいの適応に関する質問紙調査 特殊教育学研究 36 1 1-11.
- 柏村雪子 2004 障がい児のきょうだいに関する臨床心理学的研究 九州福祉研究 29 29-46.
- 日比裕泰 1986 動的家族描画法 (K-F-D) —家族画による児童理解— ナカニシヤ出版.
- 平川忠敏 2004 自閉症のきょうだい教室 児童青年精神医学とその近接領域 45 372

-378.

広川律子 2006 障がい児通園施設におけるきょうだい支援の実態について 大阪府下の施設へのアンケート調査報告 障がい者問題研究 34 2 154-159.

古川樹理・古賀靖之 2006 発達障がいを持つ家庭の家族機能における一考察—きょうだいで見た家族機能について— 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要 37 19-31.

前川 あさ美 2004 面接法 心理学研究法 心を見つめる科学のまなざし 有斐閣アルマ.

松井豊 (齋藤誠一編) 1999 人間関係の発達心理学4 青年期の人間関係 第2章親離れから異性との親密な関係成立まで 19-29 培風館.

松村祥子 2008 第29回平成家族考 社会の現状と親子の生活②—家族の多様化 月刊福祉 91 10 82-83 全社協.

柳澤亜希子 2005 自閉性障がい児・者のきょうだいに対する家庭での支援の在り方—自閉症児・者のきょうだいを中心に— 家族心理学研究 19 2 91-104.

山本登志哉 2007 意味解釈に現れる研究者の当事者性—あるエピソード解釈の事例から— あなたは当事者ではない<当事者>をめぐる質的心理学研究 171-184 北大路書房.

依田明 1978 希薄化するきょうだい関係と家族—きょうだい論の立場から— 家族関係の心理 有斐閣 45-55.